WASEDA bungaku FreePaper
vol.023_2011_summer

わからん?! 文学

Wonderful BUNGAKU

古川日出男
阿部和重 + 川上未映子 + 斎藤環 + 辛島デイヴィッド + 市川真人
池田雄一
泉鏡花
斎藤美奈子
泉京鹿
米光一成 + ナカシマカズユキ
望月旬々
円城塔
江南亜美子
大澤真幸
玉川重機
藤井久子

東日本震災に。

[短篇小説]

プーラが戻る

古川日出男

こんな時に思い出すのはプーラのことだ。

言葉づかいは少し間違っているかもしれない。こんな時に思い出せるのは、と訂正したほうが真っ当なのかもしれない。しかし、真っ当とは何だろう? あらゆるイメージがあらゆる人たちに〝その日〟の以前と以後とで異なる感情を与えている。だとしたら、この瞬間、この今に忠実に回顧するしかない。ふり返るしかないのだ。躊躇をしている余裕はないし、個人的には善いことだとも思えない。

そして善悪というラインすら消えた。

だとしたら素直に思い出そう。僕はこんなふうに語られたことがある。その女性から語られた経験があって、

¥0

Photo 迫川尚子

ある側面の感触は、ほとんど告白に似ていた。真摯で、個人的で。その女性のボイスを、僕はずっと忘れていなかった。

忘れていなかったのに、思い出したのは今なのだ。

プーラは彼女が通った中学校に棲む。卒業してから十数年が経っていて、在校していた頃には彼女は全然プーラの存在を知らなかった。「いなかったんだと思う」と彼女は言っていた。僕はこの瞬間、耳で思い出すから、これは彼女のボイスの（やっぱりボイスの）喚起だ。

プーラはその学校のプールに棲む。

プーラは、冬、プールから全部の水が抜かれてしまうまでは、そこに棲む。

プーラは夏には現われていなかった。

プーラは夜行性かもしれない。夜、ぱしゃり、と水音を立てて——まずは首から——現われる。首だ。頭ではない。長い長い、長い首の先端にたぶん頭がある。「首長竜だと思う」と彼女は言っていた。僕はもちろん、彼女は寓話を語っているんだなと思った。ちょっとしたファンタジーを創りあげて、何かを作家の僕に（とても真摯に、個人的に）伝えようとしているんだと直感した。虚構だ。

虚構の作り手の僕には、虚構に仕立て上げるしかない〝それ〟が伝わるのだ、と信じて。しかし、この理解で正しかったのか。今の僕は疑う。これは実在するプーラの物語ではなかったのか。

プールサイドの監視台の影に隠れて、彼女はプーラを待った。最初、そうだった。それからプーラは現われて、その首の長さからだいたいの全容を窺わせた。その中学校のプールは平均的な二十五メートル・サイズ、そこに収まるのだから体長は十メートル以内だろうと彼女は判断した。僕がそのボイスに耳を傾けながらいちばん感心したのは、彼女がつぎつぎと判断していった、ということだ。そうだ、彼女は自分で判断した。体長は十メートル以内で、たぶん八メートルはない。七メートルはある。雰囲気は恐竜、プレシオサウルスとかのようで、だから〝未確認の動物〟というのが最適の形容かもしれない。あのネス湖のネッシーや、そうした類い。そこから彼女は判断した、名前を授けるのならば、だったらプールの怪獣なのだから、プーラ。

彼女は、水飛沫には消毒薬の匂いがした、と言った。

彼女は、静かにプーラと交流をはじめた。

プーラは、七度めの夜にやっと彼女を認めた。

認めるというのはどういうことなんだろう？　七度めの夜であることにはどんな意味が孕まれているんだろう？　彼女は餌付けをしたと言った。それから「あたしはプーラに『プーラ』って呼びかけて、それがプーラ自身の名前なんだって、何日かは掛かったけれどもわかってもらった。あたしはプーラがそんなふうに利口なことに、なんだろう……何て言ったらいいのかな、誇り？　たぶん誇りを覚えたの。だって、ちゃんとした知性がなかったら、二十五メートル・プールでなんて棲息できない。それにあたしは、プーラと目を合わせたし。そうやって覗いていると、うん、プーラは考えているのがわかった。プーラはちゃんと思考して、あらゆることを思ってて、感情だってあるの。いっぱい、ある」と続けた。

彼女とプーラは、もちろん会話は交わせなかった。

彼女は、だから、プーラがそこに棲息しはじめた契機を知ることはなかった。

（契機？　奇妙な言葉だ。けれどもこんな言葉しか僕には使えない。たぶん、彼女のボイスには〝契機〟なんてフレーズは孕まれていない。しかし、僕の脳裡ではそんなフレーズに変換された。もともとの言葉が、発展して……。それは僕の内部に播種されて、芽生え、育ったのだ。そんな言葉なのだから、このまま使おう。契機、あるいは発端。プーラは「どうしてか」その学校のプールに棲むきっかけを得て、実際に棲み、たぶん成育した。プーラは卵生だろうか。あるいは卵胎生の動物だろうか。卵胎生というのは、たとえば鮫やエイがそうだ。母親の胎内で孵化し、〝幼生〟という形態で生み出される。そうなのか、プーラ？　僕は真摯にプーラのことを、お前のことを考えている。真摯に、……もしかしたら個人的に）

彼女とプーラは、しかし互いに認め合って、ついには泳ぎ合った。

その女性のボイスで紡がれた物語の、いちばんの核心——というか、大切な——部分は、そこだったと思う。彼女もまたプールに入った。もちろん脱衣した。彼女は全裸で泳いだと言ったし、その発言にも、そこから起ちあがる情景にも、多少の官能性はあった。だが、感触はただちにフェイズを変えた。プーラもまた裸だ、と僕は気づいた。そうだ、プーラは最初から全裸なのだ。その「首長竜だと思う」と彼女にさらっと断じられた怪獣は。プーラは雄だろうか、雌だろうか。そのプーラと、彼女は、手や鰭やそうした類いはつながなかったけれども、泳いだ。彼女はプーラの首や尾やそうした類いには触れなかったけれども、ともに泳いだ。水中でターンもした、と言った。「そうなの、身を躍らせたのよ」と言ったのだ。

「水底まで泳いだのよ」と。

秋の話だ。

この物語の背景は秋だった。初秋からはじまって、そ

れから晩秋になって、それでも彼女は泳いでいる。彼女のボイスの温かさが、濡れた、鳥肌を立てる皮膚に暖をとらせている。だが、物語は冬になる。このファンタジーは冬になってしまうのだ。

プールからは水が抜かれる。排水はほんの数時間で完遂される。彼女はそれを見た。確認した、空っぽのプールを。棲息する動物など、どこにもいなかった。彼女は「もぬけの殻って言葉を、うん、人生で初めて、頭に思い浮かべた」と言った。

プーラ、と彼女は呼びかけた。

プーラ、プーラ、と彼女は言った。

空のプールにはその呼び声がちゃんと反響した。プールに、プーラ、ラ、ラ、ラ……と。その時、彼女はふいに悟った。彼女は了察したのだ、プールには排水口があって、その通路の奥にまで呼びかけは響いている。ラ、ラ、ラ……と響いていて、だから。「届いているのがわかったの」と彼女は言った。

「うん、どこかに、脱けちゃった、プーラに」

ここまでが彼女のファンタジーだ。僕はある意味でただのファンタジーだと直感した、これを実話として語るならば彼女の精神には正常と異常のラインの「どちら側か」との問題が生じるから。しかし、そんな問題は、あるのか？　そんなラインは果たして実際引かれていたのか？

虚構？

何かを虚構だと断じられるほど、僕たちは現実を見届けたことがあるのか？

それに、と僕は思った、彼女は判断しつづけたのだ。彼女は自分で、それをした。彼女には断じられるだけの力があった、ということだ。そのことを僕は思い出す。僕はこの今、その女性のあのボイスとともに（断片の響きすら失われないボイスの、ほとんど総体とともに）思い出していて、すると、ああプーラはいるのだとわかる。いや、プーラはいたのだとわかる。

＊

それからだ。

僕はこれからプーラを見る。あらゆる場所にプーラを捜す。それは、近所の小学校のプールかもしれない。区民プールかもしれない、何ブロックか離れた場所の。いいや、あちこちのスポーツ・ジム内のプールかもしれない。その可能性を誰が否定できる？　あらゆるプールには排水口があって、排水用の「見えない」通路があって、そして、それらの通路と通路はどこかでつながっている。たとえば地中の網となって。網と接続する地中の川となって。そこからプーラが戻らないと、誰が言える？　ここから、僕は捜す。この今から、〝その日〟の以後でもあるこれから、ちゃんと捜し出す。

絶対にプーラは戻る。

〈了〉

古川日出男　Furukawa Hideo
66年生、福島県生。代表作に『アラビアの夜の種族』（日本推理作家協会賞・日本SF大賞）、『ベルカ、吠えないのか？』（第133回直木三十五賞候補）、『LOVE』（三島由紀夫賞）、『MUSIC』など。

誰に向けてこのメッセージを発するかで、僕の言葉は変わってしまう。出身地である福島の人間に向けるのか、東北から北関東の被災地のほぼ全域の人々に向けるのか、それ以外の皆に語るのか。あの日のあの瞬間から、僕の脳はずっと言葉で埋まり、同時に、僕の脳はしばしば麻痺している。「するな」と自分に言う。金縛りにあうのはわかる、しかし、金縛りにあっている暇のようなものはないのだ。誰に向けてメッセージを、と問うのも無意味だと今わかった。直面しているそこここで、僕たちが、それぞれに繋がれ。大切なのはきっと、それぞれに、だ。（本作品のウェブ公開時のコメント）

早稲田文学東日本震災チャリティと本誌vol.23巻頭特集について

震災とその後に続く原発事故に向け、「早稲田文学」では主として寄付による支援を心がけています。支援プログラムは、1）賛同する執筆者協力のもとでのサイン入りバックナンバーや著作の販売、2）書き下ろしコンテンツのデータ販売と期間限定での二次配布の許諾、3）英訳された同コンテンツの配布、4）公開イベントでの販売などです。

6月1日現在の賛同者は重松清／川上未映子／島田雅彦／渡部直己／角田光代／中森明夫／朝吹真理子／古川日出男／東浩紀／奥泉光／蓮實重彦／斎藤美奈子／堀江敏幸／阿部和重／中村文則／村田沙耶香／松田青子／円城塔／福永信／木下古栗／赤染晶子／鹿島田真希／牧田真有子／都甲幸治／青木淳悟／斎藤環の各氏と辛島デイヴィッド／マイケル・エメリック／片桐聡（以上翻訳担当）、青山南／芳川泰久／市川真人（および早稲田文学編集室一同）で、サイン入りバックナンバーや書き下ろしテキスト等が本誌サイトwww.bungaku.net/wasebun/ にて公開・販売され、売上や稿料該当分等が日本赤十字社に寄付されます。「WB」今号では、チャリティに参加した阿部和重・川上未映子・斎藤環氏らによる座談の一部と、書き下ろしコンテンツから古川日出男「プーラが戻る」の全文を掲載します。それ以外の作品やサイン入りバックナンバーについては本誌サイトをご覧頂くか、下に記載の小誌編集室までFAXまたは郵便にてお問い合わせください。折返しご案内をお送りします。（※書き下ろし作品はサイトでのデータ販売のみです。）

早稲田文学編集室
新宿区西早稲田1-9-12 小池第一ビル203　TEL/FAX:03-3200-7960
MAIL: wbinfo@bungaku.net　WEB:www.bungaku.net/wasebun/

震災と「フィクション」との「距離」

言葉・日常・物語…

阿部和重
川上未映子
斎藤環
辛島デイヴィッド
市川真人

「言葉は生き残る」か？

市川　震災に限らず、大きな規模の出来事のあと、当たり前ですがいろいろな人がいろいろなことを、いろいろなふうに言います――その「いろいろ」にはむろん沈黙も含まれているわけですが。つまりは、わたしたちの存在と「言葉」の関係が、それぞれにあらわれるし試されるのかもしれません。そんななか、エッセイや連載でそれぞれ震災に触れつつも、早稲田文学のチャリティ作品で震災後最初の作品を書いた阿部さん、川上さんといった同世代の小説の書き手がなにを考えているか。また、震災後はやい時期からさまざまな文学者の言葉を断片としてツイッターで投げていらした斎藤さんは、なにを考えていたのか。翻訳とそのコーディネイト役で今回のチャリティに加わっていただいた辛島デイヴィッドさんにも複数の言語と文化を知る立場で加わっていただいて、それぞれの立場から話をしていただきたいと思っています。

斎藤　以前『文学の断層』（朝日新聞出版）に書いたのですが、精神科医の安克昌さんが阪神淡路大震災の直後に、「思想とか文学とか、そういう理屈とか言葉はぜんぶ馬鹿馬鹿しい」「生々しい現実だけがすべてだ」と、所蔵していた大量の思想系の本をぜんぶ捨てたことがあったんです。何年かあとに、おそらくは癒えてそうした本をふたたび読みはじめた安さんは、当時の自分の状況を指して「リアル病」と〝診断〟していた。そうした反応は、遡れば関東大震災のときにもあって、印刷所がぜんぶつぶれて作家が関西に避難したりするのを見た菊池寛は「もうこれで文学はぜんぶおしまい」みたいな慨嘆を書いている。

こんどの震災後も、思想の無力とか詩の無力といった吐露はあちこちで聞いた気がします。でも、最終的にはツェランにならって、言葉は生き残るんだ、ということをぼくとしては言いたかった。それは必ずしも「希望」とは限らなくて、言葉しか生き残れない、という「絶望」かもしれないにしても、です。事実、関東大震災から一年経つと新感覚派が、少し遅れてプロレタリア文学が出てきたりもしているわけだし。

川上　普段、わたしたちの生きている日常は、「仕事」「生活」それから状況をネタで観るような層と、少なくとも三つくらいにわかれているじゃないですか。そのときどきで、どの層の濃度が高くなるかというムラはあっても、三つなら三つが入り混じっている。でも、地震によって、それらのどこかが無効になってしまったという雰囲気がなくはないと思うんです。「文学はぜんぶおしまい」みたいに言葉で認識できるぶんにはまだぜんぜん終わってなくて、言葉で相対ができないまま、日常がほどけていっている感じの人が多くいるんじゃないでしょうか。災害と原発は分けて考えなきゃいけないけれど、津波の映像にしても放射能にしても、いままで体験したことのない情報の残りかた、触れ合いかたをしている……斎藤さんは「言葉は生き残る」と言われましたが、そういう「言葉がほどけてしまう感じ」からも、やっぱりちゃんと戻ってくるものですか？

斎藤　図式的な言いかたになるけれど、そこから戻ってこられない人のことを精神科医はPTSDと呼ぶこともあります。言語に回収されない〝リアリティ〟に繰り返し圧倒される病ですね。いわばその人の人生の時計がそこで止まってしまうような。でも、ほとんどの人は言語を絶した体験からもいずれ戻ってきます。そしてその体験が新しいリアリズムを生み出す。阪神淡路大震災が「セカイ系」と「ロスジェネ」をもたらした（と、わたしは考えていますが）ようにね。「ニコニコ生放送」で東浩紀さんと対談したとき、彼も『動物化するポストモダン』から『クォンタム・ファミリーズ』にいたるまでの自分の仕事を「黒歴史」と断言し、ツイッターのプロフィールにも「現代思想時代の東浩紀1.0およびオタク時代の東浩紀2.0は死にました」と書いて、言説の流れ自体を分析する立場にいた自分を否定して見える。そんな彼自身に向けても、「言葉は生き残る」とわたしとしては伝えたいんです。余計なお節介とは知りつつも、です。

阿部　言論の無効性が震災後に感じられる、そのことの繰り返し感を指摘するために当時の言葉を示すことは、意義のあることだと思います。でも、東浩紀個人についての印象は違っていて――ぼくが彼について語ると変な文脈で受けとられかねないのでちょっと話しにくいのですが、それはさておき――過去を否定する彼の振る舞いには、一貫性があると思うんです。というのも、東浩紀はこれまでもずっと、自分の以前の仕事を否定して、新たな仕事にとりかかっている。少なくとも常に、表面上は過去を否定して現在を立ち上げてきたわけです。『動物化するポストモダン』の発表時には、『存在論的、郵便的』はほとんど無意味だと言っていたように、彼にとって重要なのはいつだって「現在」であり、それに自分がどうコミットするかを最重要視している。だから一連の発言も、震災や放射能汚染に対する直接の動揺が現れている

と捉えるより、政府だったり東電だったりの対応のまずさをずっと問題にしているところを見るべきではないでしょうか。

斎藤　その指摘も正しいと思います。ただ精神分析的にいやらしい言いかた（笑）をすれば、「乗り越え」は常に反復でもある。東さんの仕事について言えば、まさに「変われば変わるほど変わらない」という誠実さをわたしはいつも感じてきました。その〝ダイナミックな同一性〟そのものを「黒歴史」と断ち切ってしまったら、それは一種の「否認」として、〝硬直した同一性〟のほうを強化してしまわないか、という懸念があるんです。もちろん、そこにはおそらく立場性の問題もあって、批評家はカナリヤ的な反応――小さい徴候に敏感に反応することがその役割のひとつだと思うし、それは必要なことだという認識もわたしにはあります。ただ、わたしの立場ではどちらかと言うとそれに対して「たいしたことはない」と言い続けざるを得ない。

阿部　それは斎藤さんが精神科医だからですか。

斎藤　そうですね。まずひとつに、危険を察知しても簡単に避難できない。自分の患者がいる限りは、できる限りその土地に留まらざるを得ない、ということがあります。実際、被災地の人たちにはまず逃げるという発想が意外に乏しい。逃げる手段や行き先がないということもあるけれど、手段があっても逃げられない事情もいろいろある。まだ瓦礫の下に肉親の遺体が埋まっているかもしれないという人はもちろんですが、ほかに聞いた話だと夕ンス預金がけっこう多くて土中から見つかるまで逃げられない、と。「もっと銀行とか信用しようよ」と思いますけどね（笑）。

それはともかく、そういう患者さん側の理由のほかにも、医者という仕事は結局、どんな場合でも現状修復的に行動することが念頭にあるんですね。日常の営みを保っていくことにリアリティを感じる職業なんです。だから、治療以外の局面でも、そういう役割を演じがちになる。それが一種の「鈍感さ」に繋がりがちであることも否定はしません。

川上　それが、「言葉は生き残る」と斎藤さんが言われる理由でもあるんですね。

市川　ただ、今回の震災の場合、「果たして修復が可能か」という問題はあるように思います。震災ひとつであれば「復興」という言葉どおり、横光利一が「すべてが終わってしまった」と嘆いた一年後に新感覚派として現れたように、崩壊を事後的に解消してゆく「回復の物語」があるでしょう。けれども今回の場合、原子力発電所の事故という「持続する物語」が嚙み合わさってしまった。その点でぼくは東浩紀が「否定」する気持ちがよくわかる気がする。阿部さんが言われた「スクラップ・アンド・ビルド」的な一貫性は、東さんに限らずわれわれ近代の人間が、資本主義的な発展のなかで選択してきたことでもあります。しかし一回性と持続の二重化した状況は、その文法ひとつだと整理しきれないのではないか――その感覚が、東さんにしてもぼくにしても、これまでとは大きく違った対象として現在を捉えずにはいられない理由ではないかと。爆発のようなわかりやすい一過性の出来事はともかく、放射性物質の水や土壌への漏洩とそれが間接的に与えうる影響は、ほとんど確率論的にしか把握できない。

斎藤　それはそれで同感します。原発事故は被災後の時制をかなり混乱させたと思うんですよ。阪神淡路大震災が日常空間に亀裂を入れてその多層性を暴いたとすれば、震災から原発事故へという連鎖は、われわれの時間を決定的に乖離させてしまったのではないか。目前の復興に集中せざるを得ない津波被災地の時間と、錯綜する情報や「半減期」というフレームの中で宙吊りにされ続ける福島の時間。関東と関西、あるいは日本とその他の世界との間にも、そうした象徴的な「時差」がもたらされてしまった。それは文字通りの意味でトラウマ的な時間ですね。「それが起きなかった世界」を想像できなくなるという意味で。

ここで突如ベタな話をすれば、放射線はわれわれ医師にとって親しい存在で、レントゲンとかをしょっちゅう撮る立場だと、「CTの被曝に比べたらこのくらいは別になんてことはないだろう」という鈍感さもあるわけですよ。

市川　でも、それはまさに「だろう」と斎藤さんがおっしゃっている通り、確信のない推測ですよね。

斎藤　もちろん、これも推測には違いないわけですが。

市川　われわれにとってあらゆる事象が推測の対象であることに違いはないですが、問題はその「推測」にいつ答えが出るか。それが限りなく引き延ばされ、なおかつ事後的にしかわからない、そうした状態に果たしてこれまで同様「言葉が生き残る」かどうか、そしてそれは「同じ言葉」なのかどうか――もちろん、もっとも原理的な言葉は生き残るし変わらないけれど、生き残れない言葉も少なからず出てくるのではないか、ということです。少なくとも、高度成長期の政治や言説の文法では、そのシステム自体が引き起こした過剰さを処理できないのではないでしょうか。

不可能性への直面

川上　原発に関する不安の扱いをわたしたちは知らないですよね。例がないから。「危険だ」と過敏に反応する人、「安全だ」と過敏に反応する人があって、相互に攻撃しあっているけれど、それはごく当然の反応だと思う。

阿部　「安全厨」と「危険厨」だ（笑）。

川上　難しいけれど、できるだけ感情と切り離して、具体的なことを考えることしかない気がするんです。その具体的なことがない状態だから、こんなふうになってるんですけど。

阿部　「直接、原発に関わっている立場の人たちが、しかるべき対応をしていく」ということだよね。

川上　そう。ちゃんとした数字や情報を整理することの方が大事で、そのとき現場の文学的な歪みみたいなものをどう扱ったらいいかは、わたしにはまだわからない。

市川　さきほどの話は興味深いですね。川上さんは「過敏に安全」「過敏に危険」と言語的対称で両者を比べたけれど、なにを基準に「過」なのか、ということ自体が実は定義不可能なのがいまの状況ですよね。こと原発に関しては、「正しい」とされた情報のほとんどが塗り替えられて、あらゆる言説をフィクションにしか見えなくしている。中に入って確かめることのできない「原子炉」が「シニフィエとシニフィアンの乖離を確かめることのできないもの」の隠喩になってしまうような、ある意味きわめて言語的な状況。

斎藤　憶測するしかないと。

市川　「憶測するしかない」はずの言語の事実性を確認したい欲望にこそ、フィクションの問題が関わってくるのではないかと思うんです。日常生活の一側面としての原発について「本当の情報」がほしいと誰もが思ってしまうのは、「本当のものだけが価値をもつ」感覚に、読み手も書き手も巻き込まれていくことではないかということです。

斎藤　手応えのある「本当のもの」にしか耐えられなくなるのが、まさに「リアル病」の症状ですね。で、人間は長く「本当のもの」には耐えられないから幻想＝フィクションを作り出すというのがラカン派の立場です。今回の被災で問題なのは、リアル病からの回復が反動的な鈍感さをもたらしてしまう可能性のほうで、現に多くの人がメルトダウンの公表にも「やっぱりね……」以上の反応を示せなくなっている。

それにしても、専門家が知見を出して集約していくことで最適解が導かれる、という「集合知」をめぐる議論がちょうど直前にありましたよね。原発事故でそれがあっという間に崩れてしまって、専門家が関われば関わるほど、わけがわからない混乱状況が生まれてしまいもする。即時性の高いツイッターなどは構造自体がそういう状況に向かないというだけで、集合知的な集約の形態はあり得ると思うんですが、そういう状況でこそフィクションの問題を考えられるといい、というのはあると思います。

川上　さっきの「過敏」の話について言うと、なにに対して「過」であるかというより、その反応が極端になる、という意味で「過」なんじゃないかと思うんです。そういうふうに騒げる「過敏さ」は問題なくて。問題は、不安を言語化できずに、「原発が怖い、次に地震が来てしまうのが怖い。だからその前に死ぬ」みたいに、しかもそれを認識できないままゆるやかに滅んでしまうような反応で。騒ぎのなかで取り残されてゆく感じもあります。言葉を失うのは作家でも言論人でも詩人でもツイッターをやってる人でもない。もともと持ってない人がさらに失っていくんです。

斎藤　うちの周囲は家が半壊、と言うと大袈裟だけれど、瓦が落ちたり壁にひびが入ったりと、いわばプチ被災状況なんですが、そういう渦中にいるとユートピアをつくれるんですよ。中井久夫さんも『災害がほんとうに襲った時』で「今の私たちは、何でともなく世の中が回転している側にいる。災害の内部からはきっと不思議な世界の一部分と思われるだろう」と言っていたけれど、いわゆる「災害ユートピア」ですね。それに対して、周辺部の人のあいだでのほうが、暴動が起こったり窃盗があったりする。周辺部の曖昧な不安がいちばんまずいんです。今回、わたしから見ていわゆる過敏になっている人たちは、わりと周辺的な立場というか、どっちつかずの曖昧な部分にいるように思います。その立場の人にとっては、まさになにが本当か、現実と虚構のあわいがはっきりしない。その結果、不安のほうに引き寄せられやすいのではないかと思うし、その意味で、エリート・パニック的なところもあったかもしれない。

市川　震災と原発の問題が別だと思うのはそこなんです。震災に関しては、経済的な停滞もふくめれば直接の被災地以外も影響を受けるとはいえ、被災とそうでないとの違いが一応は明確になりますよね。けれども原発事故に関しては、直接の退避地域や線量の高い地域が中心であるのはもちろんと

76年生。主な著作に『ヘヴン』『乳と卵』『わたくし率 イン 歯ー、または世界』など。

しても、水や土壌のことまで考えれば潜在的に日本のあらゆる場所が、そして海外も、程度の高い低いはあっても「被災」地になる。なおかつそれが確率的な事象である以上、行政的な意味合いで「被災地と周辺」と分けることも難しい。

阿部　「安全厨」とか「危険厨」といった原発事故についての対立構造や、政府と東電の発表に発する混乱状態は、結局、情報化時代の行政の限界に行き着くんじゃないか。今回の震災に限ったことでは実はなくて、先のジャスミン革命をはじめとして、おそらく二〇〇〇年代に入ってから似たような問題が世界各地で起きている気がします。たとえばアメリカがイラク戦争をはじめたときにも、ここまで情報化が進んでいない状況だったら、政府は国民国家体制をきっちり整理しながら「この戦争は正しい」という言説で国民を束ね、「正義の戦争だ」的な主張で最後まで押し通せたかもしれない。でも、ネットで情報が即座に逐一検証されるようになって、いかにブッシュ政権がやっていることがまずいか、マスコミにかぎらず、無数の人間によってただちに指摘されるようになった。こうも情報の発表と検証のあいだに時差がないと、説明責任を果たさなければならない政権はその対応に追われてなかなか肝心の狙いをスムーズには進められない。政権と石油関連企業、または軍需産業との癒着が取り沙汰されたり、基軸通貨ドルを守るための戦争だというかなり真実味のある指摘なんかも出てきたりと、当時の時点ですでにいろいろ言われていた。そうこうするうちに、カトリーナ（ハリケーン）が来ちゃったりして国内も内乱寸前の状態になり、もう統御できなくなってしまった。

市川　「近代」が構築してきた中央集権型の言説と管理のシステムが変化しつつあるし、変化せざるをえない、ということですよね。

阿部　たとえば昨秋に起こった尖閣諸島中国漁船衝突映像流出事件も同種の問題かもしれない。あの事件もまさに、ネット社会における情報管理の問題だった。行政機関の人間が本物の映像を流出させたことで、国内統制と中国外交がますます難しくなってしまった。YouTubeが存在しない時代だったら、あんな公表はあり得なかったわけです。極論すれば、単一の情報を、一般市民の目に触れる前に思い通りに改変して一箇所（マスメディア）から流し、政府がやりたいようにやれたのが過去の状況だったとすれば、ここ十数年くらいのあいだに急速な情報化を遂げたこの社会では、情報もその流通ルートも大幅に複数化したことで、一般市民レベルでの即時的な事実の検証が可能になった。おかげで政府の嘘がバレやすい構造になっているわけです。その延長で、原発をめぐる日本政府や東電の対応の悪さ、行政の情報隠蔽への不信感が大きくなっていく。しかもガイガーカウンターなんかもネットを通じて誰でも買えるから、発表された数値とのズレがさらなる不信感を生む。検証の機会は増えたとはいえ、必ずしもそれが真実の確認には結びついていないということが問題ですね。だからいっこうに安心には至れず、さっき市川さんが言ったような「じゃあ本当はなんなんだ」という不安の増幅にしかならない。こういう状況を経験したこともなければ想定もしてこなかった、政府なり行政なりは、昔の感覚で情報を操作するつもりでいたのが、その不可能性に日々直面しつづけている、ということですね。

「正しい情報」はどこにあるのか

市川　さきほどの阿部さんの発言をぼくの文脈で言い換えれば、「近代」というもの自体がグーテンベルク型の技術に起因するツリー的テクノロジーが可能にしたものだ、ということだと思います。それとつなげて言うと、原発という存在の興味深さと収拾できなさも、そうした近代のシステムのミニチュアとして捉えるとわかりやすい。かつて中央集権的な統治システムが無数の情報をコントロールして部分的に表出し、そのことで「国家」や「戦争」――それ自体は本質的には得体のしれないものもの――を「国民」に消化可能なカタチで提示してきたように、原発のシステムも、人間のスケールからは本来コントロールしきれないものを、利用可能なカタチ、具体的にはエネルギーや電力として部分的に抽出する。そのふたつは相似形なわけです。まだ「近代」最盛期だった二九七〇年代のテクノロジーと世界のなかでは、原発の存在も、社会構造と似ているぶんあまり危なく見えなかったのかもしれない。チェルノブイリにしても、もちろん酷い事故でしたが、少なくともその瞬間は、旧ソヴィエトの圧倒的な支配力のもとで作業員たちが投入されたから、「収束した」ように見えたわけです。言い換えれば、プルトニウム239の二万四千年とか、そういう神話的な単位のものを「近代」というフィクションの装置が隠しおおせていた。けれども今日の世界構造では、原発のブラック・ボックス的システム自体が設計思想の古さを隠せなくなりつつあるんだと思います。

結局それって、「近代以降の世界をわれわれ人間が統御できるのか」という問題でもあるでしょう。ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』で論じたように、近代国家自体が印刷と言説流通に象徴される集権型テクノロジーで成立していたとすれば、ネットワークの時代にはもう「近代国家」も成り立たないかもしれない――そのこと自体の是非や未来はさておき、そこでなお集権型のものとして存在するのが電力などの物理的なインフラである、という話です。

川上　それは実感としてもその通りだと思います。情報やフィクションが、いくつも入れ替わり立ち替わり出てきて、「事実」みたいなものもいたちごっこになって拡散し、わからなくなっている……と思いきや、でも、都知事選からの流れで見ると、ネットの世界は本当に小さいんだなという気もするんですよ。ネットに親和性が高いところから見ると、どこの放射線量が危険だとか、ものすごいせめぎ合いをして見えるけれど、いま東京の公園でも、普通に子どもが遊んでますよね。赤ちゃんとかも。

阿部　情強と情弱の乖離。

斎藤　いわゆるデジタル・ディバイドですよね。

川上　東京都知事選挙でも、ネットの雰囲気では、石原慎太郎の四選なんてありえなかったでしょう？　でも……。

阿部　八時になった途端、もう当確みたいな（笑）。リアルの政治の現場では、そっちが勝つんだよね。

川上　そう。だから抽象的に統御できるかできないかを考えていくこともちろん必要だけれど、なんであれ「マジョリティ」とか「リアル」って、ひっくり返すには想像もつかない時間がかかると思う。結局はまだテレビの時代で、それを見てお母さんとかが判断するんだよね。ほんとうに違う世界に生きている気がします。「みんな野菜食べよう！」とか「福島いいよ！」とかになりがちだし、見る方も安心したいから、平常性バイアスによってそっちをつい信じてしまう。その意味で、さっき阿部さんや市川さんが「近代」と呼んだ「大本営的」なシステムは、まだまだ根強く残るんじゃないですか。

斎藤　ネットだけ見ていると、世界が透明になったように見えてしまうし、地球は平らになったと思いやすいけど、それはほんとごく一部ですよね。特に日本に関しては、世代間のギャップは決定的で、五十代以上のネット非使用率はすごいものがある。その溝をどうするか。テレビにはいまなお「お墨付き」の機能があって、「放映されたら事実になる」みたいなところがあるでしょう？　それに対してネットの情報はまだふわふわしているから、役割としてテレビにはまだちょっと追いつかない。

市川　ただ、テレビは地上波の局数が少ないことや視聴率のこともあって、どうしても最大公約数的な内容になりがちですよね。「誰も置いてけぼりにしない」感じ。

川上　うん、だからこそ、Windowsとネットの違いもまだよくわからない人たちに、ただ不安を与えるんじゃなく、「福島の野菜はまだなにもわかっていないんだ」ぐらいのことは言わなきゃいけないと思いますよね。ネットであれこれと情報が伝わっていても結局は狭いところでしかなくて、すでに情報が行き渡っているところにしか新しい情報が投下されないから。

阿部　そしてそれは、情報格差だけでなく、リテラシーの問題でもありますね。その意味では、一定のリテラシーを有している人間が交通整理に当たる必要もある。つまり、情報弱者と情報強者のあいだを繋ぐことが、言論の果たすべき役割ではないか、ということだよね。

市川　このあたりで、「情報」や「テレビの位置づけ」では日本語ネイティヴなわれわれとはいくぶん違った視点があるかもしれないデイヴィッドにも聞いてみたいんですが。

辛島　いまの「情報」の話で言うと、今回ぼくが経験したのは、日本語と外国語、ふたつの流れで情報が入ってくることの怖さでした。友人の半分が外国人で、みんな広尾に住んでいるんですが……地震から二日目に消えた（笑）。

阿部　わかりやすいな！

辛島　有栖川公園から誰もいなくなって、広尾は完全にゴーストタウンでした。広尾に住んでいる外国人たちは、お金もあるし行くところもあるし、大使館から情報が入ってくるから。ぼくは広尾に住んだことないですが……。

阿部　そんな情報はいらない（笑）。

辛島　それはともかく、彼らがそういう行動をとるのは、やはり各大使館から情報が入ってくるからなんですよね。大使館には日本にいる自国民への責任があるから、そのためにコントロールしている部分もふくめて、日本とはまったく違う報道をしたんです。

川上　危険を大きめにとって、安心枠をとったということですか？

辛島　そうですね、「リスクを考えて早めに避難しろ」と。そういう情報が伝わってくる一方で、日本のＮＨＫは同じと

とをずっと流している。「正しい情報」はその中間のどこかにあるんだろうと、地震の直前に買った五十何インチの馬鹿みたいにデカいテレビを点けっぱなしにしながら横のパソコンでネットをずっと掘りに行って、電力を使いまくっていたんですけれど（笑）、真実に近づいている感じはまったくしませんでした。ネットの情報に自信が持てないのはもちろん、海外のCNNでもBBCでも記事を書いている記者たちを知ってしまうと「本当にというわかってんのかな？」と、すべてを疑いたくなってしまうんです。言語が増えても、決定的な情報があるわけではないんですよね。

阿部　ここ三か月ぐらいのあいだのわれわれはたぶん、同じようなことをずっとやっているんだよね。テレビを見ながら、ネットで情報を探って、どれが本当かなと個々人で判断する——そういう感覚で過ごしていたわけで。

斎藤　ツイッターにも書いたけれど、われわれが福島に対して感じていることを、世界はJapanに対して感じているんですよね。一種の「穢れ」みたいな感じで扱われてしまっているわけです。誰も放射能の「本質」を理解できないので、とりあえず「近い」人から順に差別したり、うがい薬を飲んで「浄め」てみたりと。

コンピュータ・メディエイテッド・カタストロフ

川上　どなたかも書いてましたが、一回だとどうしても偶然性に軸を置いちゃうじゃないですか。

市川　「想定外」という言葉がまさにそれを意味していますよね。二度目には使えない言葉だから。

川上　みんなが心の底から「これは本当にヤバい」とわかるためには、二回来ないと駄目なのかも知れませんね。

斎藤　いやいや、そうか？（笑）

阿部　世界規模だと三回か四回か、そのぐらいはあるじゃない？　日本規模でも小さいものだったら東海村もあったし。

川上　それがやっぱり距離とリアリティの問題ですよね。距離と時間が隔たると、経験として蓄積されない。

辛島　「震災と距離」というのはたしかにありますよね。今回の災害も原発事故がなければ東京の人たちがここまで巻き込まれたかどうか、動いたかどうかはわからない。距離が離れれば離れるほど——時間におけるdistanceでもあるし、physicalなdistanceでもあるけれど——、そのことによって薄れていくものもあれば、逆に増幅されるものもあるんだと思います。

斎藤　距離の問題は難しくて、阪神淡路のときは、被災地域が明らかに同心円状でしたよね。被災地が中心にあって、その周りに周辺があった。最初のほうで市川さんが言われたように、今回はその「中心」がどこかわからない、ということはあると思います。

　同時に、阪神は最初の「テレヴァイズド・カタストロフ」と言われましたが、今回は最初の「コンピュータ・メディエイテッド・カタストロフ」です。ネットで中継されたはじめての震災。ネットの存在と放射能によって、中心と周辺が曖昧になってしまったとも言えるし、全体が周辺化したとも、すべてが被災地になってしまったとも言える。

辛島　ぼくが経験したことで言うと、震災の一か月後ぐらいに現地に入ったあと、仕事の関係でイギリスに行き、また現地に戻り、それから東京で過ごして、次はアメリカに行って……という変な生活が続いたんです。そうするとわかるのは、日本ではまだ震災は大きなトピックですが、海外ではひとつ大きな出来事が起こるとそれが変わる。ロンドンにいたとき、ちょうど結婚式の前で、メディアも国民もウェディング一色だったんですよ。

斎藤　「ロイヤル・ウェディング」というやつですね。

辛島　その瞬間に、日本はメディアから消えましたね（笑）。ニューヨークにいたときはたまたまビンラディンが暗殺されて、グラウンド・ゼロで、「ビンラディン暗殺パーティ」をやっていました。その瞬間、やっぱり日本のことは消えた。その意味では、さっき阿部さんは「世界規模では三回、四回」と言っていたけれど、個人で三回、四回と感じている人は、たぶんいないんじゃないですか。

川上　だからやっぱり同じ場所で、できるだけ短い間隔でないと残らない。

阿部　その意味では「広島と長崎は成功だった」と？

市川　「浜岡やっちゃえ」みたいなこと？

斎藤　二回やれば抑止力にはなりますよね、たしかに。いや、川上さんの指摘はかなり本質的で、たしかに一回だけのものは象徴化されやすい。つまり、象徴であるがゆえに象徴的対応という誤作動をまねきやすいわけです。二回目が来てようやく「現実」になる。ただ時間的間隔が重要で、ヒロシマとナガサキは間隔が短すぎて二回性のものとして象徴化されてしまった。症例が一例だけだと特異な〝例外〟にしかならないけど、二例あれば疾患単位として普遍化できるような話です。「現実」というのはそういう意味です。

川上　二回あれば充分かどうかも、実際にはわかりませんけど。おそろしいね。

市川　でも、いまの話はじつはリアルですよね。いまの川上

集英社
創業85周年記念企画

コレクション
戦争×文学
［全20巻＋別巻1］

日清日露の戦いから9・11まで、約350の文学作品を集成した画期的な全集。

編集委員
浅田次郎
奥泉光
川村湊
高橋敏夫
成田龍一
編集協力
北上次郎

第1回配本〈2冊同時発売〉
⑧アジア太平洋戦争
太宰治／高村光太郎／野間宏／火野葦平／吉村昭／蓮見圭一 他
⑲ヒロシマ・ナガサキ
原民喜／林京子／川上宗薫／井上ひさし／美輪明宏／青来有一 他
●特大巻・発刊記念特別定価（各）3、570円（税込）
（第1回配本のみ、2012年8月31日まで）

第2回配本／8月5日発売予定
④9・11 変容する戦争
第3回配本／9月5日発売予定
⑤イマジネーションの戦争
※以降、毎月5日頃一巻ずつ刊行
（予価3、780〜3、990円）
●四六判ハードカバー／角背
●各巻640ページ〜840ページ／一段組
●カラー口絵、註、資料、月報付き
●装幀＝クラフト・エヴィング商會

好評刊行中！
全巻ご予約受付中！

◎全巻の内容
現代編
①朝鮮戦争 中野重治 他
②ベトナム戦争 開高健 他
③冷戦の時代 五木寛之 他
④9・11 変容する戦争 リービ英雄 他
⑤イマジネーションの戦争 芥川龍之介 他
近代編
⑥日清日露の戦争 石川 淳 他
⑦日中戦争 阿川弘之 他
⑧アジア太平洋戦争 三島由紀夫 他
⑨さまざまな8・15 太宰 治 他
⑩オキュパイド ジャパン 安岡章太郎 他
テーマ編
⑪軍隊と人間 柴田錬三郎 他
⑫戦争の深淵 大岡昇平 他
⑬死者たちの語り 安部公房 他
⑭女性たちの戦争 向田邦子 他
⑮戦時下の青春 永井荷風 他
現代編
⑯満洲の光と影 村上春樹 他
⑰帝国日本と朝鮮・樺太 李恢成 他
⑱帝国日本と台湾・南方 佐藤春夫 他
⑲ヒロシマ・ナガサキ 原 民喜 他
⑳オキナワ 終わらぬ戦争 灰谷健次郎 他
別巻 戦争文学年表・資料

全収録作家・作品名がホームページで閲覧できます。
「戦争×文学」ホームページ http://www.shueisha.co.jp/war-lite/
もしくは 集英社　戦争×文学 検索

さんの発言を読んだ誰かが、あるいはそれを阿部さんが小説に書いたとき――『ニッポニアニッポン』の続篇のようにして――「浜岡を続けて爆破すれば、日本人に危機感が芽生えるんじゃないか」と考える人がいてもおかしくないわけです。政治信条の左右を問わずある種の「憂国者」の武力決起はしばしばそういうロジックで行われる。それは結局、自分のいる位置や行動こそが「中心」でありたいという欲望とも結び付いているんだけど、どんな理由であれ現実問題としてはすごく困るし、今回の報道で設計図まで詳らかになった原発のセキュリティを考えるとけっこう出来てしまいそうだからなお困る。そのうえ政府のこの数か月の様子を見れば、彼らに危機感を与えたくなる気持ちもわかるし（笑）。

阿部 実際、ビンラディンを失ったアルカーイダの報復テロの標的として、福島第一原発はあり得るという内容の記事は普通に出てますしね。

川上 もちろんわたしも「起こすべきだ」と言っているのではないですよ。当然だけど。ただ、それぐらいに、大多数の人間が同時に危険のリアリティを持つことは難しいと思う。正直に言って。諦めているわけでも自棄になっているわけでもないんだけれど、「さて、どうするかな」みたいな感じ。なにしろ放射線は見えないから、目を逸らそうと思ったら目を逸らせるわけです。それぞれの生活もあるしね。お子さんがいる人はまたちょっと違う意識があると思うけれど、さっき斎藤さんが言ったみたいに、平常性のなかに放射線をちらちら意識するという生活にも、けっこう適応してしまうでしょう？

斎藤 そうです、そうです。

市川 いや、見えないからといってほとんど「ない」と捉えたり、申し訳のように意識して適応していいのか、という話でしょう？

川上 だめだと思うよ。でも、仕事や学校があって、福島なり東京なりから離れられなければ、そこで生きていくしかないですよね。常識のひとつに「今日の放射線予報」が組み込まれていくとかの、「放射能とのつきあい方」みたいな感じ。

斎藤 身体にいいという話もありますよね（笑）。

川上 でも、だからこそ、3・11以降にそういう意味でやっぱり変わったんだよね、大きく。

想像力の機能、あるいは限界

阿部 「二十ミリシーベルト問題」をめぐる混乱は正直、放射線の専門家たちにきっちりケリをつけてほしいものがありますけどね。見解の一致は無理でも、どこかで折り合いをつけないといけない。それは政府や行政や東電を介さずに、あくまでも科学者としての倫理ベースで専門家たちが主体的に二か所に集まってガイドラインを作成して、とりあえずこうなったからという感じでアナウンスしてもらえると、それがひとつの基準、考える土台にはなるからさ。

市川 ただ、それはあくまで発病率の問題だから、事後的にしかわからないんですよね。〇・一％と言われて油断したら発病し、三％と言われて警戒したら発病しない、とかならわかりやすくていいけれど、ごくごく小さな確率の問題としてしか記述できない以上、結局はその数字をどう解釈するか、という主観的バイアスの方が大きくなる。単純に賭けるなら、〇・一％か三％かで悩むより、九九・九％なり九七％なりに賭ければいい、という考え方だってあるわけです。それって量子力学的な世界観やマクロ経済学的な問題意識とも似ていて、表向きはどうあれ、後期資本主義社会やそこにおける政府の考え方はそっちですよね。「放射線の影響は、実はニコニコ笑ってる人には来ません」と言った学者がいたり、その人が福島県の放射線健康リスクアドバイザーになるなんていうのも、そういう文脈ですよね。

斎藤 医療で言えば「エビデンス」、つまりデータや統計値にもとづいて判断するんだけれど、通常のデータ、それこそ「高脂血症は何ミリグラム以上が危ない」みたいなものですら、実際はアテにならないんですよ。そもそも「こういうエビデンスがある」と誰かが言えば、別のエビデンスが出てくるという状況があり、なかでも放射線に関してはその振れ幅がとても大きい。「危険だ」というエビデンスもあれば、「身体にいい」というエビデンスもあるぐらいだから。結局それは、限られたデータからしかエビデンスをとれない、サンプリングの集団の差でしかないと思うんだけれども。それこそコーホート（共通の因子を持つ母集団）として村ひとつ、村民全員の健康調査をむこう三十年つづけるとかすれば最強のエビデンスになるでしょうが、日本はそういうことが苦手なんですよね。

市川 でも、だからこそ今回それを調べるべきだということじゃないですか。「復興」は、どれだけ途方にくれるほど

「原発って、なに？」を知るアプリ

かつて「がんばれ森川くん2号」などの独創性あふれるソフトウェアを産み出した森川幸人氏が率いる、株式会社ムームー。現在は任天堂DSなどの家庭用ゲーム機むけのソフト開発に加えて、iPhone用のアプリや電子書籍にも守備範囲を広げている。

そんな同社がこの6月に、アプリ『原発って、なに？』を送り出した。

事故を起こした福島第一原子力発電所の処理目標を「廃炉にすること」と仮定して、それまでの行程や私たちの生活への影響を「正しく怖がり」ながら知ることを目的としたこのアプリ。先頃「電子書籍アワード2011」（主催・メディアファクトリー）の大賞を獲得した同社の電子書籍『ヌカカの結婚』のテイストや操作性はそのままに、ウラン235を燃焼（分裂）させてタービンを回す原子力発電のしくみや、放射線のなにが体に悪いのか、「使用済み燃料棒」とはなんなのか、などをわかりやすく解説してくれる。たとえば、よく混乱する「シーベルト」と「ベクレル」の違いは、こんな感じ。

アプリ『原発って、なに？』には、このほか「分裂が続くことがキモ」「元素の数字」「5つの「壁」」「発電開始！　発電ストップ！」、「残り火」「棒が溶ける」「レベル7」「自然に被ばく」「負の貯金」「埋葬」「高速増殖炉」などの目次があって、オトナからコドモまで、誰もがわかりやすく原子力発電の仕組みの基礎や、新聞や雑誌などで報道されたりWEBで使われる言葉の意味について知ることができる。「あとがき」には森川氏の「私たちはいまなお、不安と危険の中にいます。だからこそ、正しく怖がる必要がある。そう考えました」というメッセージと、アプリがボランティアによってつくられた旨が記載されている。

『原発って、なに？』はただいま、iTunes storeやApp storeで好評無料配付中。iTunes storeの直接リンクはhttp://itunes.apple.com/jp/app/id440660563?mt=8

iPhoneやiPadでApp storeに接続し、「原発って、なに？」で検索してもダウンロードできます。

5つの「壁」では、原発がマトリョーシカにたとえられています。

シーベルトとベクレルの関係は、
おおざっぱにいって、
このような関係にあります。
放射線の種類×ベクレル＝シーベルト
（放射線の量）（体への影響）

79年生。英訳書に金原ひとみ『蛇にピアス』、松浦寿輝『P.』、筒井康隆『時をかける少女』など。日本語での著作に『神村企画 The Making of the Next Kamimura』。

の被害であってもその道筋なり予想図なりが描けるわけで、困難は「なにができるか」の少なさではなく膨大さにある。それに対して放射線は、「なにができるか」が見えないだけに、確実にできることはしたほうがいいでしょう。今から三十年かけてそれを測っても、われわれの世代が直接得るものはないかもしれない。しかし、子供や孫、あるいは百年後の世代に対して情報提供だけはできる――そう考えてもいいとは思うんです。

川上　でもさ、東京の東電本社の人たちもわたしたち電力を使って生きる個々人も、たかだか三百キロ離れた福島のことを想像できなかったわけでしょう？　百年後のことを想像できる人がいると思う？　どなたかが雑誌で書いてたんだけれど、どの家庭にも四十年使っている家電なんてないじゃないですか。でも原発は四十年も使っている。本来ならもう停止しているはずなのに、廃炉にお金がかかるとか、検査すると問題が出てくるからとか、そういうことで先のばしにしてきたんですよね。それをマネジメントできる人が誰もいなかった――ほんとうの意味では原発に関わっている人が誰もいないんだよね。現場の人が酷使されても、そういった声も掻き消されていく。そんな状態なのに、「百年後の未来のために」ってできるんでしょうか。もちろん、いま気づかなければ、これはもう、本当にチャンスはないと思うけれど、「百年後に対して想像力を働かせる」ことが具体的にどういうことなのか、そこから考えないといけない。

市川　それこそが、作家の責任なんじゃないのかな。百年後について、想像力を駆使して書けるじゃないですか、作家たちは。

川上　でも、想像力を駆使して書いたことは、結局、解決にはならないんじゃないですか。フィクションが寄り添うものだったり耐え難い現実の緩衝材だったり、そういう役割はできても。そういう存在をつくることと、百年後の未来を想定していま現実的にどう振る舞うかを考えることは、似ていて違うことだと思うんです。

市川　言っていることはすごくわかる。関東大震災のあとの「早稲田文学」を読んでいたら、坪内逍遥が演劇について「フィクションの役割は、この状況においては癒しであり喜びとしてしか機能しないのだ」「復興において必要なのはさまざまなプロレタリア労働者であり、現場の仕事なのでフィクションライターは彼らが疲れて帰ってきたときにそれを癒す役目を負えばいい」ということを言ってしまっている。

川上　広い意味での「癒し」よね。全方位への緩衝材というか。

市川　でも、百年後の読者としては、逍遥に対して少しイラっとしたんですよ。ぼくはいま鴻巣友季子さんと、海外文学と日本文学を比較して読む「国境なき文学団」という対談連載を「文藝」でやってるんだけど、そうやって並べて読むと、現代日本のいわゆる純文学の小説の多くはすごく小粒に見えるんですよね。エンターティンメント小説だって、テーマはかなり「身近」だし。もちろん、阿部さんの『シンセミア』に始まる「神町サーガ」はすごく広い射程をもっていてボリュームもあるし、東浩紀の『クォンタム・ファミリーズ』や橋本治の『リア家の人々』は時間を幅広くとって成功しているけれど、それらは稀有な例であって、多くの、とりわけ賞とか狙わされてる若手の作家たちは、百何枚で力タがつく三日間の話とかなんですよね。あれはもう、「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」と最初に決めて、「ちょっとした癒しと愉しみにしかならん」と言った逍遥、アンタが悪いよと（笑）。もっと大きな作品が、いまこそ必要なんだと思う。

川上　どきっ。「三日間」。

斎藤　時間の問題じゃないよ（笑）。『カラマーゾフの兄弟』は四日間。

川上　「乳と卵」はまさに三日間の話だなと思って（笑）。

「物語」の役割

川上　もちろん、大きな話は大きな話にしか達成できないものがあって、小さいものには小さいものの役割があるとは思うんです。ただ、震災以後、仕事のことに限って言うとすごく大きな変化があったんですよ。

さっき市川さんの言った「大きいものを書けばいいのに」という話とも繋がると思うんだけれど、小林秀雄が「だが、古来如何なる芸術家が普遍性などという怪物を狙ったか？　彼等は例外なく個性を狙ったのである」と言うみたいに、春樹さん的に言えば「井戸を掘り続けることでしか、大きいところに出られない」的な価値観が、これまでずっとあったよね。わたしは、どうやらそれを信仰に近いかたちでもっていたわけです。ちょうどいま、祖母が死にかけていて、父も死にかけていて、ということもあって、なおさら個人の一回性や死というものに隣接して考えていた。もともと、「いつか死ぬ」ということが大きな問題だったこともあって。

ところがそこに、震災と原発事故が一挙に起きたわけです。いままでも、無数に戦争があって、いっぱい人が死んでいっている、ということは頭ではわかっていました。でも、今回の地震は、そうした「一回性」の感覚が全面的にチャラになるような体験だった。祖母と父が死にかけている最中でさえ、その一回性が薄まって、一人称が消えて、二人称も消えて、三人称の世界になりました。一瞬ですけれど。それがわたしにとっては大きかった。新幹線で大阪に帰っているときに風景を見るでしょう？　そうすると、「いま走っているここが波に飲まれた」という――想像が近くなる、というのかな。たぶん震災以後、新幹線からの風景を見た人のほとんどが感じたことだと思うんです。「たら・れば」ではない、しかしいま現実に起きているわけでもない、ということまで味わったことのない距離感で、ものが見えたわけです。

『シンセミア』の例が出たけれど、ああいう大きな小説――無数の人が出てきてその群像を書き、ひとつの世界を構築して何かに到達するという方法――と、たとえば『ヘヴン』みたいな小説――一人称と二人称の間のものを掘っていく方法――のふたつがあったとき、そうは言っても結局わたしの信仰している方法のほうが強い、と思っていました。絶対に。阿部さんは、ぽんぽん人が死ぬ小説を書くじゃない？　もちろん意図も技術も圧倒的だし、素晴らしいとは思うんだけど、しかし一方で「ほんとに阿部さんは「人が死ぬ」ってことがわかってるの？」ぐらいに思ってるところもあった。もちろんわたしもわかってないんだけど、しかし人の死に対して解像度をあげて考えたことのある形跡をみてとれなかったわけ。「そんなんじゃないだろ、人の死っていうのは」と。同じレベルで同じことを書いたら、わたしの方法のほうが――方法が、ですよ、到達できる距離も深さも絶対長くなると思っていた。足下の井戸を掘るべきだし、それしかないだろうと思っていた。

でも、震災で、その考え方がいったん白紙になりました。阿部和重の方法のほうに可能性があるんじゃないか、と（笑）。これは震災で一人称が無効になったとかそういう話じゃなくて、無効にならないし、なくなりようがないから面倒なわけであって、もう一度、一人称とそれを支える一回性を取り戻すための方法としての三人称を捉え直すという意味です。もちろん人は黙っていてもすべての人称を生きているわけですが、すべての人称を同時に生きてしまうその矛盾そのものへ、深く関わることのできる方法だと改めて気づかされました。

斎藤　そう言われた阿部さんはどうですか？

阿部　どう返せばいいか難しいけれども（笑）、いまのふたりの話を聞きながら思っていたことを話せば、さっきの話をものすごく乱暴に要約すると、市川さんが言っていたのは「この状況を描いて百年後に伝えることが、作家の責任だ」ということ？

市川　状況を描くことでも、「この出来事を受けて」というのでもなくて、そもそもの存在論として、百年スパンの物語を語れたり、百年後に届く物語を語れるのが「作家」ではないか、ということです。

阿部　語れる立場として、ってことね。たしかに文学というかフィクションがこういうなかで機能できる部分は、間違いなくあると思う。百年後の読者に向けてもそうだし、いまこの状況に生きている人たちに向けてもそう。少し前に話した、無数の議論があってそれ自体が混乱してひとつに束ねられない、そういうなかで「いまこの人がこういうふうに語っている」と即時的に伝えて情報整理をするのはジャーナリズムの役割だと思うし、それに対して「文学」というジャンルに携わっているわれわれは、即時的に伝えることは出来ないけれど、ゆっくりと時間をかけて吟味しながら、ひとつのまとまった視点――それはあるいは「物語」ということかもしれないけれど――にまとめて、そこで起きていることの「本質」なのか、あるいはある「特徴」なのか「傾向」なのかわからないけれど、ともかくそういうものを提示することができると思うのね。それこそが「小説」というか「フィクション」にやれることなんだろうなと。

逆に言うなら、「フィクション」は各時代ごとに、いろんなことが起きるたび、そのようなものとして機能してきたんだろうとも思います。ある出来事なり事件なりについて、特徴的な一面を見出したり、「核心」なり「解釈できる何か」なりを与えるというか、ね。

川上　いまの阿部さんの話とも関係すると思うんだけれど、市川さんが「もっと大きい射程」と言うのは、必ずしも風呂敷の大きさではなく、時間の問題でもないですよね。たとえばこの震災のときに書きうる「大きいもの」、百年後への想像力を駆使するというのは、どんなもののことなんでしょう。たとえば百年後に残っているベストセラーが、震災とはまったく関係ない、現実から目を背けるための緩衝材として

71年生。著作に『芥川賞はなぜ村上春樹に与えられなかったか』『小説の設計図』『紙の本が亡びるとき?』（前田塁名義）など。

機能する物語かもしれないし、逆に吉村昭の『三陸海岸大津波』みたいに、百年後の震災のときに読むと効くものもあるでしょう？　そこで言う「百年」ってどんなものなの？

市川　「百年後に読まれるもの」を書くことと、長い射程――描く時間が長いという意味でも、描いている世界が広いという意味でもいいけれど――で描くことは、また別の話ですよね。今日の文脈で言えば、等身大の「わたし」のようなものから遥かに隔たった場所を織り交ぜて描かれた作品、ということかな。小説にはどうやったって視点、つまりカメラとなる記述や言語化の支点が存在するし、逆に言えばそれがどうしたって大きくなる。「私小説的な私」である場合もあれば、「作者」である場合もあるけれど、いずれにしてもそこに大きなウェイトが置かれがちになるのは、ひとりの人間が自分の視点で世界を観察し記述するというテクノロジーの構造上自然なわけです。けれどもそれは、さっきの川上さんの「二回性」の問題のように、ある限界を抱えもする。だから、それを相対化できるような大きなものを同時に描ければ、「俯瞰的視点」と言ってもいいし「われわれの矮小さへの意識」と言ってもいいけれど、そうしたものが作品にとっても読み手にとっても意識できるわけで、そういう装置をとりあえず「百年」と言ったんです。

川上　それは平たく言うと、自意識ではなく、他意識みたいなものを書けばいいじゃないということ？　そうしてそれは市川さんが読みたいということ？　それとも必要だということ？

市川　もちろん個人の要求ではあるけど、同時に必要だとも思う。原発の話と関わるんだけど、事故の影響についてぼくはおそらく今日の五人のなかでもシリアスに考える側ですよね。でもそれは、原発事故がたんに「危ない」「怖い」ということではなくて――ぼく単体にとってのリスク計算で言えば、寝不足で深夜に車を走らせている瞬間のほうが危ない気がする（笑）――、われわれの日常のなかに見えやすいかたちで大きなスケールのものが投入された出来事だと捉えるからなんです。もちろん地球が出来たときからそれは遥かに大きな宇宙のなかにあるわけだし、経済ひとつとってもぼく個人の財布は遥かに大きな規模の経済のなかで揺られている。その意味でぼくたちはすごく大きなもののなかに常に在るんだけれども、自意識というものは、そのことを常に忘れさせるわけですよね。極端に言えば、この「わたし」こそが地球ひとつと同じぐらいに重いかのように思ってしまう。それは生きていくための健全な鈍感さでもあるけれど、しかし常に過ちの源でもあるわけです。この「わたし」が地球ひとつと同じに重いなんて価値観は、原理的に、「わたし」以外の誰とも共有できないある種の誇大妄想じゃないですか。そのとき、自分の人生の時間的尺度で言えば七十年なら七十年がすべてであると思いそうになるのを、放射性元素の半減期が新聞に日々身近なこととして書かれるだけで、「数万年という時間があるんだな。それはこの七十年の何倍なのか」ということを忘れずにいられるじゃない？

川上　半減期一万年とか言われるとね。

市川　その角度で言うと、さっき違うと言ったけれど「百年経った小説」の機能も、ある意味そういうところにあると思うんですよ。書かれている物語は十九世紀の、それも三日間の話かもしれない。でも、百年を経たのちに読まれることで、いま読むわたしたちとそこに書かれた百年前の情景との距離が、無意識のうちに併せて読み込まれることにもなる。それが古い作品の意味のひとつだと思うんですよ。

川上　成功しているかいないかはわからないけれども、多かれ少なかれフィクションを書いている人間はそれを目指している気はしますね。

阿部　「この状況」だけなら、すでにいろんなところで書かれているんだよね。それこそTwitterなりブログなりで、書かれすぎているぐらい書かれている。それが結構前のほうで話した、情報化の一面でもある。そこでわれわれプロの物書き、小説を書いている人間が、言わば疑似ドキュメンタリー的な無数の「つぶやき」や「日記」とどれだけ明瞭に区別できるものを書けるのか。そのドキュメンタリー性と比してもなお意義のある試みと読まれ得るものを書けるのか。もちろんこれは震災発生以前からあった課題なわけです。そして必ずしも、技術論に集約されるべき問題でもない。結局のところは、事態をどのように捉えて抽象化するかにかかっているんだと思いますね。

川上　その面で言うと、阿部さんが早稲田文学のチャリティでお書きになった、「乗ってけサーフィン」は、鎮魂と希望が同時に示されて、あらゆる意味で見事な小説だった。あと短いし（笑）。

市川　「乗ってけ～」じゃなくて「RIDE ON TIME」だけどね、タイトルは（笑）。たしかにあれはすごくいい作品だったと思います。直接「震災」とは書かれていないんだけれど、ある金曜日に来る大波を人々が待ち望んでいて、それが実際に来るまでの一週間の話ですよね。阿部さんに「津波でサーフィンする話」と聞いてて、届いて読み始めたら実際にそうだったから、「うわ、これどうすんだよ」と爆笑しながら読み始めたんだけど、気付くとすごく静かで哀しい予感、未来の記憶とでも言うべきものとともに読み終えることになる。描かれた時間的にも分量的にも短いんだけれど、それこそそこに、読んでいる自分の頼りなさと世界の大きさを自覚させるようなものがあるんですよね。

川上　それとも結び付いて今回の震災で忘れられないのが、阿部さんがいとうせいこうさんとツイッターでやりあったのを読んだんですけど、その流れでひとりの人がリプライを飛ばしたんですよ。ちょうど島田雅彦さんが呼びかけた「復興書店」をめぐるあれこれがあったときもあって、阿部さんはいとうさんの批判に反論しつつ、「復興書店」への参加もとりやめたんだけど、その読者の人が「そんな書店の存在初めて知りました。すげーダサいっすね。いまどきサイン本なんてだれが買うの？　マジ温度差ですよ。文学なんて終わってんすから」と言ったあとに……。

阿部　あの人はたしか被災地の住人なんだよね。

川上　そう。それで続けて「それでも本売るくらいなら、いい小説書いてください。津波で流されたオレの実家気仙沼は、シンセミアのラストそっくりでした」と書いたんだよね。それが記憶に残っています。そこには本質的なものがありますよ。自分の実家が流されていて、それがあなたの書いた世界にそっくりだったと。で、いい小説を書いてくれって小説家に言うんです。それがどういうことなのかうまく言語化できていないけれど、読んだときに二時間涙が止まらなかったんですよ。短いツイートのなかにいろんな問題があって、それってフィクションが与えられるものと奪うものの話でもある。「小説書かなきゃな」って思いましたよ。それ読んだときに。作家のナルシシズムといわれようがなんだろうが。どんなことができるかわからないけれども。あのツイートは、今回の震災でいろんな人がいろんなことを言っているなかで、フィクションに関してはものすごい記憶に残った、忘れられない呟きでした。

議論はつづく。続篇を含む完全版は、今夏発売予定の「早稲田文学④」にてお届けします！

早稲田文学 増刊 π
〝わりきれないおもしろさ〟号
大好評発売中!!

【詩】
川上未映子
『ヘヴン』の著者による新作散文詩
「誰もがすべてを解決できると思っていた日」

【実力派新人の小説と対話】
佐々木中「九夏前夜」
革命を叫ぶ思想界の俊傑、渾身の処女作！
古井由吉×佐々木中
文学への確信に満ちた滋味深き語らい
松田青子「もうすぐ結婚する女」
本誌3号と「U30」で話題の新人、本領発揮
今日マチ子×松田青子
人気マンガ家と語る〝逸脱〟のススメ

【座談会】
浅田彰・松浦寿輝・渡邊守章
「〝ハイブリッドなマラルメ〟のために」
全集完結、プロジェクト始動。高踏なる鼎談ここに

【対談】
町田康×朝吹真理子
「〝わけのわからない〟を読む」
書くことと読むことをめぐって

定価◉1,280円（税込）

【予告】
早稲田文学④
今夏刊行予定
［シリーズ＊日本〝現代〟文学］§1「出発点」としての大江健三郎（1/3）
［東日本震災をめぐって］
座談 震災とフィクションの「距離」
世界の被災地から発する言葉
早稲田文学東日本震災チャリティ作品掲載
［翻訳］ついに完結!!
ウラジーミル・ソローキン「青脂Ⅲ」（ほか）

発行・発売◉早稲田文学会
お問い合わせ・ご注文先　TEL・FAX 03-3200-7960
※刊行時期・掲載内容等は予告なく変更する場合があります。

俺の人生に時給くれ！

池田雄一 IKEDA YUICHI

特別篇　もうやってらんねえぜ！という思想

もしくは裏声でうたえ My Generation

69年生。文芸批評家。著書に『カントの哲学』。共著として『ネオリベ化する公共圏』。

ことロックにかぎっても数多くある音楽のジャンルのなかで、「パンク・ロック」は非常に不思議な、というか語るのがむつかしいジャンルである。パンクについて（あつく）語れば語るほどパンクの定義からとおくはなれていってしまう。これはいったいどうしたことか。

この場合の「パンク」とは、1970年代初頭にアメリカ西海岸のアンダーグラウンドで開始された、いわゆるニューヨーク・パンクというよりも、それがイギリスに輸入されてはじまったロンドン・パンク、もっといえば端的に**セックス・ピストルズ**のイメージである。

パティ・スミスは、たしかにパンク・ロックにおける女神のような存在ではあるが、彼女はあくまでアンダーグラウンド・カルチャーの女神であって、パンクそのものではない。キリストは誰かの罪で死んだけど私のではない、という断言ではじまる「Gloria」は本当にいい歌だと思うけど、パンクかといわれると、おそらくそうではないだろう。

おそらくパンク・ロックには文化の香りがしてはならないのである。ではパンクは文化なしの様式なのかといえば、そうでもない。様式にウエイトをおくのはプログレであってパンクではない。たとえば中森明夫の『アナーキー・イン・ザ・JP』（新潮社）がかろうじてパンクたりえているのは、文章がどへたというのもあるが、とにかくそれが絶対にプログレではないからである[1]。プログレというものが何かわからない人は、**坂本龍一と平野啓一郎を足して2で割ったもの**だと考えていただければいいだろう。もしくはピンク・フロイドでも聴けばわかるだろう。

純化されたパンク・ロックとは、娯楽でもなければ、ましてや創作活動というのでもない。YouTubeなどで**セックス・ピストルズ**のライブ映像をみればわかるが、それはどちらかといえば何かの「症状」にちかいものである。ボーカルであるジョン・ライドンの身ぶりは、ヒステリーの発作のように、もしくは小学生がダダをこねているようにみえる[2]。アンダーグラウンドの芸術活動であったパンク・ロックは、イギリスに移植されることによって、何かの症候となることに成功し大衆の支持を獲得することになる。

1970年代前半のイギリスは、ダメ国家の道をつきすすんでいた。主要産業の国有化により国際競争力が低下し、オイルショックの波をもろにかぶることになる。人々の労働意欲は減退し、ストにより公共サービスはたびたび機能不全に陥っていた。**イギリスは「英国病」にかかっていたのである。**

パンク・ロックという運動の実体は、**いい加減やってらんねえぜ！**という大文字の他者に対するメッセージを、行為へと変換することである。結果としてそれはミニマル化されたアイロニーとでも呼ぶべき形式を獲得することになる。ピストルズをみればわかるように、アイロニーとは表現の切り口をつくる作業であり、その意味で非常に攻撃的な言語行為である。アイロニーはあくまで行為であり、それが概念化されてしまうとシニシズムと見分けがつかなくなる。パンク・ロックがパンクであり続けるには、アイロニーを行為において実践し続ける必要がある。ピストルズの活動が瞬時に終わってしまったのは、そうしたことと関係があるはずだ。パンク・ロックがサボタージュの身ぶりだとして、それはまず何よりも、自分の行為が意味をもってしまうことへの拒絶の身ぶりなのだ。

それでは、このサボタージュは否定的な効果しか産まないのか。おそらくそうではないだろう。

たとえば、濱本真男は、生きることと同義である労働laborと、生きるために必要とされている労働jobを分けている[3]。前者の観点からみると、つまらない授業のあいだにみる白昼夢は立派な労働である。そこでは、生きることと労働することと思考することとがおなじである。**思考と行為がべつだとされるのは、物象化され合理化された思考こそが思考だと考える偏見にもとづくものである。**権力はつねに人間をjobに封じ込めるため、laborを抑えこもうとする。それは同時に人に思考を停止させようという圧力を意味する。ACジャパンのCM、復興や節電へと人を参加させる言葉、自称現実主義者による雄弁、**のりピーへの社会的リンチ**などは、人から思考する力、つまり夢をみる力をうばいとる。おなじことが企業や文化人によるチャリティ活動、善意によるボランティア活動、あるいは反原発運動にあてはまらない保証はどこにもないはずだ。実際のところ、すでに我々は、風評被害にあっているかわいそうな農民、もしくは放射線の被曝の危機から逃げることのできない気の毒な地元民、といった貧困なイメージ以外、3.11以降の世界について思考することができなくなっていはしないだろうか。

だとすれば、3.11以降の状況において何かことを起こすにしても、この「やってられねえぜ」からはじめるべきだろう。必要なのは、知識人による講演会やティーチ・インなどではなく、当事者どうしの愚痴の言いあいである。原子炉によるユートピア、あるいは原子炉のない、放射能のないユートピア、いずれからも排除されているのが、件の原発事故の当事者である。都民もふくめたわれわれ「福島」国民は、すでに被曝しているわけで、もはやユートピアの住人にはもどれない[4]。3.11以後のわれらが住めるのは、一寸さきは闇である確率の世界である。この世界でやっていくためには、各自の「やってられねえぜ」を表明しないことには先に進めない。ぜひ**「ギリギリな俺たち大集合！」**といったイベントをひらき、参加者どうしで愚痴を言いあっていただきたい。震災の悲惨さを伝えるイメージ映像に、セックス・ピストルズの「God Save The Queen」を重ねあわせる素直さが求められる。3.11以降を生きるわれわれは、人生何度目かの「My Generation」を歌う時にきているのだ。

(1) 2010年に書かれた小説については、中森のほかに、阿部和重、綿矢りさ、『俺俺』（新潮社）の星野智幸といった作家が、パンク・ロックと共通する身ぶりをしめしている。池田雄一「回顧2010」『文藝年鑑2011』、新潮社、2011、を参照。

(2) 実際には、歌舞伎の見栄をきるようなライドンの身ぶりには幼児期にかかった髄膜炎の影響もあったらしい。

(3) 濱本真男『「労働」の哲学』、河出書房新社、2011. 濱本は、生きるために必要な労働に付随する思考を、生きることと同義の思考と区別するために「認識」と呼んでいる。認識は現実をつくりだす能力があり、思考にはその能力が差し引かれている。認識にとって、思考とは破壊行為を意味することになる。おそらくおなじことが批評についても言うことができるはずだ。

(4) くわしくは、池田雄一「われら『福島』国民　3.11以降を生きるためのアジテーション」、『思想としての3.11』、河出書房新社、2011、を参照。

現代作家が選ぶ世界の名作リターンズ特別篇

十六夜

泉鏡花

きのふは仲秋十五夜で、無事平安な例年にもめづらしい、一天澄渡つた明月であつた。その前夜のあの暴風雨をわすれたやうに、朝から晴れ〴〵とした、お天氣模樣で、辻へ立つて日を禮したほどである。おそろしき大地震、大火の爲に、大都は半、阿鼻焦土となんぬ。お月見でもあるまいが、背戸の露草は青く冴えて露にさく。……廂破れ、軒漏るにつけても、光りは身に沁む月影のなつかしさは、せめて薄ばかりも供へようと、大通りの花屋へ買ひに出すのに、こんな時節がら、用意をして賣つてゐるだらうか。……覺束ながると、つかひに行く女中が元氣な顏して、花屋になければ向う土手へ行つて、葉ばかりでも折つぺしよつて來ませうよ、といつた。いふことが、天變によつてきたへられて徹底してゐる。

女でさへその意氣だ。男子は働かなければならない。――こ、で少々小聲になるが、お互に稼がなければ追つ付かない。……既に、大地震の當夜から、野宿の夢のまださめぬ、四日の早朝、眞黑な顏をして見舞に來た。……前に内にゐて手まはりを働いてくれた淺草ッ娘の婿の裁縫屋などは、土地の淺草で丸燒けに燒け出されて、女房には風呂敷を水びたしにして髮にかぶせ、おんぶした嬰兒には、ねんねこを濡らしてきせて、火の雨、火の風の中を上野へ遁がし、あとで持ち出した片手さげの一荷さへ、生命の危ふさに打つちやつた。……何とかや――いと呼んでさがして、漸く竹の臺でめぐり合ひ、そこも火に追はれて、三河島へ遁げのびてゐるのだといふ。いつも來る時は、縞ものの、そろひで、おとなしづくりの若い男で、女の方が年下の癖に、薄手の圓髻でじみづくりの下町好みでをさまつてゐるから、姉女房に見えるほどなのだが、嬰兒が乳を呑みますから、私は何うでも、彼女には實に成るものの一口も食はせたうござんすから。――で、さしあたり仕立ものなどの誂はないから、忽ち荷車を借りて曳きはじめた――これがまた手取り早い事には、どこかそこらに空車を見つけて、賃貸しをしてくれませんかと聞くと、燒け原に突き立つた親仁が、「かまはねえ、あいてるもんだ、持つてきねえ。」と云つたさうである。人ごみの避難所へすぐ出向いて、荷物の持ち運びをがたり〳〵やつたが、い、立て前になる。……そのうち場所の事だから、別に知り合でもないが、柳橋のらしい藝妓が、青山の知邊へ遁げるのだけれど、途中不案内だし、一人ぢや可恐いから、兄さん送つて下さいな、といつたので、おい、合點と、乘せるのでないから、そのま、荷車を道端にうつちやつて、手をひくやうにしておくり届けた。

「別嬪でござんした。たゞでもこの役はつとまる所をしみ〴〵禮をいはれた上に、「たんまり御祝儀を。」とよごれくさつた半纏だが、威勢よく丼をたゝいて見せて、「何、何をしたつて身體さへ働かせりや、彼女に食はせて、乳はのまされます。」と、仕立屋さんは、いそ〳〵と歸つていつた。――年季を入れた一ばしの居職がこれである。

それを思ふと、机に向つたなりで、白米を炊いてたべられるのは勿體ないと云つてもい、。非常の場合だ。……稼がずには居られない。

社にお約束の期限はせまるし、……實は十五夜の前の晩あたり、仕事にかゝらうと思つたのである。所が、朝からの吹き降りで、日が暮れると警報の出た暴風雨である。電燈は消えるし、どしや降りだし、風はさわぐ、ねずみは荒れる。……急ごしらへの油の足りない白ちやけた提灯一具に、小さくなつて、家中が目ばかりぱち〳〵として、陰氣に滅入つたのでは、何にも出て來ず、口もきけない。拂底な蠟燭の、それも細くて、穴が大きく、心は暗し、數でもあればだけれども、祕藏の箱から……出して見た覺えはないけれど、寶石でも取出すやうな大切な、その蠟燭の、時よりも早くぢり〳〵と立つて行くのを、氣を萎して、見詰めるばかりで、かきもの所の沙汰ではなかつた。

二

戸をなぐりつける雨の中に、風に吹きまはされる野分聲して、「今晩――十時から十一時までの間に、颶風の中心が東京を通過するから、皆さん、お氣を付けなさるやうにといふ、たゞ今、警官から御注意がありました。――御注意を申します。」と、夜警當番がすぐ窓の前を觸れて通つた。

さらぬだに、地震で引傾いでゐる借屋である。颶風の中心は魔の通るより氣味が惡い。――胸を引緊め、袖を合せて、ゐすくむと、や、や、次第に大風は暴れせまる。……一しきり、しきり、たゞ、辛き息をつかせては、ウ、、、、ヒューとうなりを立てる。浮き袋に取付いた難破船の沖のやうに、提灯一つをたよりにして、暗闇にたゞよふうち、さあ、時かれこれ、やがて十二時を過ぎたと思ふと、氣の所爲か、その中心が通り過ぎたやうに、がう〳〵と戸障子をゆする風がざッと屋の棟を拂つて、や、輕くなるやうに思はれて、突つ伏したものも、僅に顏を上げると……何うだらう、忽ち幽怪なる夜陰の汽笛が耳を忍ぐつて間ぢかに聞えた。「あ、、（ウウ）が出ますよ。」と家内があをい顏をする。――この風に――私は返事も出來なかつた。

カチ、カチ、カ、チ
カチ、カチ、カ、チ

雨にしづくの拍子木が、雲の底なる十四日の月にうつるやうに、袖の黑さも目に浮んで、四五軒北なる大銀杏の下に響いた。――私は、霜に睡をさました劍士のやうに、付け燒き刃に落ちついて聞きすまして、「大丈夫だ。火が近ければ、あの音が屹とみだれる。」……カチカチカ、チ。一靜かに打つてゐるのでは火事は遠いよ。「まあ、さうね。」といふ言葉も、果てないのに、「中六」「中六」と、ひしめきかはす人々の聲が、その、銀杏の下から車輪の如く軋つて來た。

續いて、「中六が火事ですよ。」と呼んだのは、再び夜警の聲である。やあ、不可い。中六と言へば、長い梯子なら届くほどだ。然も風下、眞下である。私たちは默つて立つた。青ざめた女の臉も決意に紅を潮しつ、、一戸を開けないで支度をしませう。」地震以來、解いた事のない帶だから、ぐいと引しめるだ

けで事は足りる。「度々で濟みません。――御免なさいましよ。」と、やつと佛壇へ納めたばかりの位牌を、内中で、此ばかりは金色に、キラリと風呂敷に包む時、毛布を撥ねてむつくり起上つた――下宿を燒かれた避難者の濱野君が、「逃げると極めたら落着きませう。いま火の樣子を。」とがらりと門口の雨戸を開けた。可恐いもの見たさで、私もふツと立つて、框から顏を出すと、雨と風とが横なぐりに吹つける。處へ――靴音をチヤくと刻んで、銀杏の方から來なすつたのは、町内の白井氏で、おなじく夜警の當番で、「あ、もう可うございます。漏電ですが消えました。――軍隊の方も、大勢見えてゐますから安心です。」「何とも、ありがたう存じます――分けて今晩は御苦勞樣です……後に御加勢にまゐります。」おなじく南どなりへ知らせにおいでの、白井氏のレインコートの裾の、身にからんで、煽るのを、濛々たる雲の月影に見おくつた。

この時も、戸外はまだ散々であつた。木はたゞ水底の海松の如くうねを打ち、梢が窪んで、波のやうに吹亂れる。屋根をはがれたトタン板と、屋根板が、がたん、ばりくと、鏡を追つたり、入りみだれたり、ぐるくと、踊り燥ぐと、石瓦こそ飛ばないが、狼藉とした繃詰のあき殼が、カラカランと、水鷄が鐵棒をひくやうに、雨戸もたゝけば、溝端を突駛る。溝に浸つた麥藁帽子が、竹の皮と一所に、ブンと臭つて、眞つ黑になつて撥上がる。……もう、やけになつて、鳴きしきる蟲の音を合方に、夜行の百鬼が跳梁跋扈の光景で。――この中を、折れて飛んだ青い銀杏の枝が、ざぶりくと雨を灌いで、波狀に宙を舞ふ形は、流言の鬼の憑ものがしたやうに、「騒ぐな、おのれ等――鎭まれ、鎭まれ。」と告つて壓すやうであつた。

「私も薪雜棒を持つて出て、亞鉛と一番、鎬を削つて戰はうかな。」と喧嘩過ぎての棒ちぎりで擬勢を示すと、「まあ、可かつたわね、ありがたい。」と嬉しいより、ありがたいのが、斯うした時の眞實で。

一消して下すつた兵隊さんを、こゝでも拜みませう。」と、女中と一所に折り重なつて門を覗いた家内に、「怪我をしますよ。」と叱られて引込んだ。

一、

誠にありがたがるくらゐでは足りないのである。火は、亞鉛板が吹つ飛んで、送電線に引掛つてるのが、風ですれて、線の外被を切つたために發したので。警備隊から、驚破と駈つけた兵員達は、外套も被なかつたのが多いさうである。危險を冒して、あの暴風雨の中を、電柱を攀ぢて、消しとめたのであると聞いた。――颶風の過ぎる警告のために、一人駈けまはつた警官も、外套なしに骨までぐしよ濡れに濡れ通つて――夜警の小屋で、餘りの事に、「おやすみになるのに、お着替がありますか。」といつて聞くと、「住居は燒けました。何もありません。――休息に、同僚のでも借りられればですが、大抵はこのまゝ寢ます。」との事だつたさうである。辛勞が察しらるゝ。

雨になやんで、葉うらにすくむ私たちは、果報といつても然るべきであらう。

曉方、僅にとろりとしつゝ、目がさめた。寢苦い思ひの息つぎに朝戸を出ると、あの通り暴れまはつたトタン板も屋根板も、大地に、ひしとなつてへたばつて、魁廻を跳らした、ブリキ罐、瀝戸のかけらも影を散らした。風は冷く爽こに、町一面に吹きしいた眞蒼な銀杏の葉が、そよくと葉のへりを優しくそよがせつゝ、芬と、樹の秋の薫を立てる。……（後略）

（大正十二年十月）

引用出典：岩波書店『鏡花全集　巻二十七』より

泉鏡花
Izumi Kyoka

一八七三―一九三九。尾崎紅葉に師事し、社会通念の矛盾をつきつめて描く「観念小説」で脚光を浴びる。その後、花柳界や妖怪趣味など江戸風俗に溢れる幻想的な作品群を数多く残した。豊かな語彙を縦横に駆使して独特の旋律でたたみあげる文体は圧巻。小説に「義血侠血」「高野聖」等。震災当時は麹町の自宅にいた。

今号の「現代作家が選ぶ世界の名作リターンズ」は、震災特別篇として、一九二三年九月一日の関東大震災を描いたテキストの中から小誌が選びました。

講談社◆話題の文芸書

稲葉真弓
半島へ

川端賞受賞の名作「海松」を超えた、
究極の「半島小説」

その春、
「私」は
半島に来た。

森と海のそば、
美しい「休暇」を
過ごすつもりで――。
たったひとりで、
もう一度、人生を
始めるために――。

定価1,680円(税込)
ISBN978-4-06-216977-6

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

旧作異聞 ㉔

ご当地文学篇

『小僧の神様・城の崎にて』
（新潮文庫）

斎藤美奈子
Saito Minako
56年生。94年、『妊娠小説』で評論活動をはじめる。古典とベストセラー、時事問題からマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著作には、読者の物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。『文芸誤報』『本の本』など。

城崎（兵庫県豊岡市）は、山陰道は但馬を代表する古い温泉地である。多くの文人墨客が訪れたことでも知られるが、ゆかりの作品として特に有名なのは志賀直哉『城の崎にて』（一九一七年）だろう。

しかし、この際、いわせていただこう。『城の崎にて』は史上最低最悪の「ご当地文学」といってもいいんじゃないだろうか。小説は〈山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた〉という一文からはじまる。語り手は〈背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねない〉という死の恐怖に取り憑かれた状態にあり、それがテキストの空気を決定しているのである。

まず描かれるのは「蜂の死骸」だ。ある朝彼は、一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つける。蜂はそのままの姿で三日ほど経ち、彼は〈冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見る事は淋しかった〉が〈それは如何にも静かだった〉という、何のおもしろみもない感想を漏らす。

次に描かれるのは「瀕死の鼠」だ。ある日散歩に出ると、人々が円山川の支流に投げ込まれた鼠を見て騒いでいる。〈鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚釘が刺し貫してあった。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出ている〉という状態である。見るも無惨な動物虐待の光景だ。懸命に石垣に這い上がろうとする鼠に見物人はおもしろがって石を投げ、もがく鼠を見て笑う。さすがに彼は〈淋しい嫌な気持になるが、やっぱり意識は〈死に到達するまでのああいう動騒は恐ろしい〉という自分の死へと収斂されていくのである。

そして最後が「蠑螈（イモリ）の死」だ。ある日の夕方、彼は小川で半身を出しているイモリを見つけ、驚かしてやろうと石を投げる。ところが石が命中し、過失とはいえイモリを殺してしまった。しかし彼には後悔も反省もなく〈可哀想と想うと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた〉という他人事のような感想を述べるのだ。

いやはや、いい趣味をしているではないか。放置された虫の死骸、鼠に対する虐待、イモリの殺傷ないし過失致死。

『城の崎にて』は「心境小説」の傑作と呼ばれている。心境小説とは私小説の一種で、〈作者が生活記録に託して、その心境を描写した小説〉（『広辞苑第六版』）などと説明される。が、結核を患った主人公が赤蛙が溺れ死ぬのを見る島木健作『赤蛙』（一九四六年）といい、病気療養中の主人公が蚤や蜘蛛を閉鎖空間に閉じ込める尾崎一雄『虫のいろいろ』（一九四八年）といい、心境小説とはすなわち「自分の病を言い訳にして小動物が苦しむ姿を鑑賞する小説」とほぼ同義といっても過言ではないほどだ。残虐な描写には「読者にも死の恐怖を味わわせたい」という作者の悪意さえ感じる。

文学は道徳の副読本ではないのだから、動物愛護の精神に反するのはべつにかまわない。ただ問題は、事実をありのままに書くといいながら小動物（外部）の描写がすぐさま死を思う自分（内面）に直結する点で、その手つきこそ、悪しき文学趣味に思えるわけ。

観光資源として活用するには、およそ相応しくないご当地文学。しかし「文学を解さぬ無粋なヤカラ」と軽蔑されるのが怖いのか、取り上げられただけでも嬉しいのか、誰も表立って文句はいわない。なにしろ志賀直哉は「小説の神様」の威名を轟かす「文豪」だし、『城の崎にて』は高校の国語の教科書にも載る「名作」だし、谷崎潤一郎『文章読本』でも『城の崎にて』の蜂の描写が絶賛されている。この短編の権威は絶大なのだ。

したがって、城崎では志賀直哉はやはり特別な作家として遇されているのである。ただ、その扱いは微妙である。城崎温泉観光協会の公式サイトでは『城の崎にて』ではなく「湯はよく澄み、山と川が美しく、日本海の魚がうまい」という直哉の談話がトップを飾る。直哉がこの小説を執筆した老舗旅館「三木屋」のサイトでは、三つの小動物の死それぞれの「現場」の地図まで示してあるが、作品の文章は引用していない。

権威にはすがりたいが、内容には立ち入りたくない。城崎の人々は内心思っているのではないか。「志賀先生よ、城崎を舞台にするなら、もう少しマシな話を書けなかったのかね」と。もっとも万一抗議されたら作家は抗弁したかもしれない。あれは「城の崎」であって「城崎」ではない、と。残酷ご当地文学の悲喜劇。これが愛らしい蜂や鼠やイモリだったら、絵にも像にもアイコンにもご当地キャラにもできただろうにね。

金原瑞人選 オールタイム・ベストYA

とむらう女
ロレッタ・エルスワース／代田亜香子訳

十九世紀半ばの大草原地方を舞台に、「おとむらい師」のフローおばさんとともに、母の死の悲しみを乗りこえ、死者をおくる仕事の大切な意味を見いだしていく少女の姿を描く感動の物語。 ＊1680円

希望（ホープ）のいる町
ジョーン・バウアー／中田香訳　3刷！ ＊1890円

《ニューベリー賞オナー賞》

あたしはパパの名も知らず、ママも幼いあたしをおばさんに預けて出て行ってしまった。でもあたしは、自分の名前をホープに変えて、人生の荒波に立ちむかう。ウェイトレスをしながら高校に通う少女が、名コックのおばさんと一緒に小さな町の町長選で正義感に燃えて大活躍。

私は売られてきた
パトリシア・マコーミック／代田亜香子訳

《全米図書賞最終候補作》
《グスタフ・ハイネマン平和賞受賞》
3刷！ ＊1785円

貧困ゆえに、わずかな金で親に売られた十三歳の少女。衝撃的な事実を描きながら、深い叙情性をたたえた感動の書。

ユミとソールの10か月
クリスティーナ・ガルシア／小田原智美訳

最新刊！

学校のオーケストラとパンクロックとサーフィンをこよなく愛する日系少女ユミ。大好きな祖父のソールが不治の病に侵されていると知ったとき、ユミは彼の口からその歩んできた人生の話を聞くことにした…。つらいときに前に進む勇気を与えてくれる物語。 ＊1890円

好評既刊4冊！

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4／価税込
TEL03(3262)9753　FAX03(3262)9757

カーリル×WB ウチのオススメ

レシピ版

図書館横断検索サイト「カーリル」のレシピ機能。好きな本を集めてレシピをつくり、いろんな人に届けることができます。ここでは、そのなかからWB編集部クボキがピックアップ！

児童文学の傑作

『長くつ下のピッピ』
リンドグレーン
ピッピ。力持ち、お金持ち、お父さんの帰りを待ち。

『ロッタちゃんのひっこし』
リンドグレーン
わがまま放題のロッタちゃん、温かく見守る大人たち、素敵です。

『名探偵カッレくん』
リンドグレーン
仲良し3人組が、怪しいおじさんに出会って…。ハラハラ痛快の夏休み。

子供のころ大切にしていたことを思い出したい人に

アストリッド・リンドグレーンの話は、何といっても子供たちが魅力。いつもいい子ってわけではありません。喧嘩にいたずら、約束は守らない、嘘もつく。でもそれは、子供をありのまま受け入れ、肯定してくれるということ。読んでいると、大人から見れば些細なことだけれど、子供の頃に大切に思っていたことをふと思い出す、素敵な作品ばかりです。

cokemonoさん
http://calil.jp/recipe/8926104
物としての「本」が好き。デジタルとはまた別の愛着があります。

あなたを魅了する数学ツアー

『ルイス・キャロル解読
――不思議の国の数学ばなし』
細井勉
アリスの話って、なんだか変…。そう思った人への、不思議な数学ツアー。

『アリスと旅する 不思議な「数」の物語』
つりひろやす
有名な童話に隠された数の謎をアリスといっしょに解き明かす。

『数学脳をつくる８つの方法』
岡部恒治
今からでも遅くはない！　子供から大人まで楽しんで身につく数学センス。

数学が好きな人、嫌いな人に

これらの本を読めば、数学が嫌いな人は数学が好きになり、数学が好きな人はますます好きになること間違いなし！「あんなに苦手だった数学が驚くほど簡単に！」「数学って、こんなに楽しくて面白くて役に立つものだったんだ」と思える、驚きと発見にあふれた数学ツアーに参加してみませんか？

子供にはもちろん、大人にも読んでもらいたい3冊です。

angieさん
http://calil.jp/recipe/9156088
本が好きで好きで仕方がない☆。最低３冊、鞄にないと気が済みません。

探検に秘密基地、まいにちの冒険……。この本を読んだら、ぼくもすっかり子供の心に！　ブタのバムセといっしょに冒険の旅に出るのです。

スウェーデンの児童文学作家リンドグレーンさんの作品をたくさん紹介。宮崎駿に「この世の楽園」とほめられ、映画化もされた『やかまし村の子どもたち』や短篇集『カイサとおばあちゃん』などなど。ぜひ上のURLから元のレシピも見てみてくださいな！

小さなときに外でいっぱい遊んだ人も、ゲームばっかりしてた人も、ここに描かれたどの遊びも自分が体験したように楽しめる。それが本の魅力。cokemonoさんが絶賛するスウェーデンの自然と田舎風景を味わって、ぼくもすっかりスウィーディッシュ！

わ、わ、わっ。数学！　イヤ！！　ヤダ！！！　ぎゃー。

え、でも物語なの？　アリス？　それなら知ってるよ。兎とか帽子屋とかネズミが跳ね回る、へんてこりんな物語。そんなアリスのお話に、じつはたくさんの数の秘密が隠されてたって知ってた？　それだけじゃなくて、マッチ売りの少女、白雪姫、アリとキリギリスにも不思議な数が出てくるみたい。ぼくはもうすっかり知ってるよ！　アリスはね、ずっとおやつの時間なんだよ。

angieさんはほかにも本を紹介してくれました。できたらもっと中身の紹介がほしいな。そしたらもっと数学の本が読めるから。

本を借りるならカーリルで！ http://calil.jp/

今日のカーリル
カーリルが携帯電話にも対応！
http://m.calil.jp

「カーリル・レシピ」で本を紹介してくれる人、大募集！

レシピは3ステップで作ります。❶オススメしたい人とタイトルを決めて、❷本を３冊以上選び、❸思い入れを書き込みます！　準備ができたらはじめましょう。

カーリル・レシピ URL　**http://calil.jp/recipe**

「ウチのオススメ（レシピ版）」では毎回、**書かれたレシピの中から２つを選び**、ご許可をいただいた上で**紹介させていただきます。**

Waseda Bungaku Free Paper
WB vol.23

2011年6月25日発行　（年4回刊）
Published by　浦野正樹
Edited by　芳川泰久（Editor in Chief）
横山絢音　青山南
福井咲貴　貝澤哉
関口拓也　十重田裕一
大内啓輔　三田誠広
鶴岡眞屋子　山本浩司
窪木竜也
朴文順　市川真人
（Concept & Direction）
Design　奥定泰之

Special thanks to　山本恵美子　山崎貴之　青木誠也　都丸尚史　洛西一周　杉山和世

編集・発行　早稲田文学会／早稲田文学編集室
169-0051　東京都新宿区西早稲田 1-9-12 小池第一ビル 203
TEL/FAX 03-3200-7960
http://www.bungaku.net/wasebun/

印刷　凸版印刷株式会社
112-8531 東京都文京区水道 1-3-3
TEL 03-5840-4845　FAX 03-5840-1676
http://www.toppan.co.jp/

▼震災を境に「やりたいことしかしない」と宣言したのもつかのま、「やったほうがいいだろうこと」と「やらなきゃいけないこと」が山積して相変わらずの日々。それでも今号の特集や、この夏に友人や仲間と温めている企画（このＷＢが出るころには公になっているかもですが）は、「やるべきこと」であると同時にはっきり「やりたいこと」でもあるので、前向きに生きていこうと思います。▽…と書いていたら、「じゃあぼくは以下同文で！」とうれしげな若者が後ろに。「小学校の卒業式とかで校長先生が「以下同文」というじゃないですか、あれを聞いてどきどきしたものです」などといっていますが、ここは小学校でないので（黄色い帽子をかぶった人はいますが）自分で考えてもらいましょう。（Ic）

▼いかどうぶん（キリッ▽こどもはムツカし気な言葉に憧れ、意味もわからないままムヤミにまねてみるものですが、その言葉の意味を教えてくれた、小学２年生にしてすでに大人だった加藤くん、元気かなあ。▽Facebookの普及で級友たちと再会、忘れていた物事を思い出すことがあります。とは言えどうやっても当時へ戻ることはできず（戻りたいとも思わないけれど）、記憶と記録を手がかりに過ぎ去った日々を思う。自分が経験したことの記憶ばかりでなく、知らない誰か（たち）の記憶を思い出す。矛盾する言葉ですが、そんなフィクションのことを考えています。▽この秋に友人や仲間と温めている企画（右の広告）を行います。主に高校生（むろん就学中か否かは問わず）に向けたもの。ぜひご参加ください。▽今号は青木淳悟氏の「家庭科」がお休みです。（K）

▼被災地の方々とそれを助ける方々、そこで働く全ての方の健康をお祈りします（再び Ic）

高校生・大学生対象
ワークショップ＆セミナー開催！

文芸編集者らによるWEBマガジン「セロファン」では、表現することを志向する若い人たちに向けたイベントを行います。

【プログラム】
朝吹真理子+**ゲスト**によるワークショップ＆セミナーほか
※内容は予告なく変更することがあります。あらかじめご了承ください。

【対象】
16～22歳のすべての人

【日時】
2011年9月～10月を予定

詳細は、下記セロファン・ブログにて近日発表します。乞うご期待！
http://projectcellophane.blogspot.com/

1/6909※

世界の言語を訪ね歩く 第2回

中国の作家たちが描く“生は彼方に”

泉 京鹿
Izumi Kyoka

71年生。約16年にわたり北京に在住。多くの現代小説と文化を翻訳・紹介する。朝日新聞GLOBE「世界の書店から」で中国のベストセラー紹介を連載中。訳書に、おバカエログロ歴史物語の傑作、余華『兄弟』（文春文庫）など。さらに本文にも登場する、郭敬明の長篇『悲しみは逆流して河になる』（講談社）がこの6月についに刊行！

「生活在別処（sheng huo zai bie chu）」――日本では『生は彼方に』というタイトルの邦訳がある、チェコ出身の小説家ミラン・クンデラの *La vie est ailleurs* の中国語タイトルである。

漢字からそのまま日本語で意味を読み取ろうとすれば、「生活は別のところにある」というふうに読めるだろう。しかし、中国語の「生活」は日本語で日常的に使う「生活」「暮らし」を指すほか、「生きる」「人生」そのものを指す意味でも使われる。この「生活在別処」は、「生は別のところにある」ということであり、「別処」は「彼方」と訳しても差し支えなく、邦訳の『生は彼方に』にも近い表現といえる。

中国人にとってこのフレーズは、クンデラ人気とともに、すっかり馴染みのあるものになっている。特に若い世代が好んで使うフレーズであることは、少なからぬ人が個人ブログのタイトルに使っていたり、若手作家の小説にたびたび引用されていたりしていることに顕著である。

1999年に刊行された『上海宝貝』（邦訳『上海ベイビー』文春文庫、2001年）が、外国人男性との奔放な性愛をはじめ退廃的な都市の若者たちの生活を描いたとして物議を醸し、のちに発禁処分となり、国内外で一躍有名になった70年代生まれの衛慧（ウエイフエイ）。彼女が『上海宝貝』よりも前に書いた作品で99年に刊行（98年に文芸誌に掲載）された『像衛慧那様瘋狂』（邦訳『衛慧みたいにクレイジー』講談社、2004年）の中には、次のように引用されている。

愛しの媚眼儿には理想主義の色彩がある。彼は遥か遠くにある優雅な都市のまだ見ぬ生活に向かって、目的のためにちょっと遠回りをしているだけの、“生活在別処”で天真爛漫な男の子だ。

今では世界のどこでも中国人観光客の姿を見ない国はないほどだが、90年代半ばごろまでは旅行、留学、出張にかかわらず、海外への出国には厳しい制限があった。だからこそ、若者たちはあらゆる手段を講じて、なんとか海外に脱出しよう、物理的に「別処」に行こう、と試みた。この作品では、外国人女性と結婚して海外での生活を夢見る若者が、「ちゃっかりした愛すべき男の子」として描かれている。

やがて90年代後半、そして今世紀になると、海外へは行けないまでも、インターネットというツールを手にして、若者たちは自分だけの「別処」を持つようになった。作品の多くの舞台が上海であるなどの共通点やそのペンネームから衛慧と比較されがちな、ネット小説からブレイクした若い女性たちのカリスマ作家・安妮宝貝（アニー・ベイビー）。2000年に刊行された処女作『告別薇安』（邦訳『さよなら、ビビアン』小学館、2007年）に収録されている短篇「空城（からっぽの街）」にも、このフレーズが登場する。

彼もまた必ず出て行ってしまうだろう。生活はいつだって、かなたにある。

「いつだって」という言葉を間に挟んでいるものの、クンデラの作品のタイトル「生活在別処」を意識してのフレーズであることは間違いない。物理的な空間の移動がかつてよりずっと自由になった若者たち。アニー・ベイビーの作品には、旅をしながらネットで知り合った男友達を訪ね歩く主人公、またその男友達たち、旅先で出会う人々……心の居場所を探してさまよい続ける人々が少なからず登場する。

さらに若い、「80后（バーリンホウ）」と呼ばれる80年代生まれを見てみよう。2年連続中国作家長者番付トップ、毎年のように100万部以上売り上げる作品を刊行し続ける郭敬明（グオジンミン）。主に同世代や、「90后（ジウリンホウ）」世代に絶大な人気を誇る。エッセイと短篇をまとめて2002年に刊行した初めての作品集『愛与痛的辺縁』の中に、「生活在別処」と題したエッセイがある。

「生活在別処」、なんてすばらしいフレーズだろう。

1968年以前に、ランボーがこのフレーズを口から、あるいはペン先から生みだした。1968年、このフレーズはパリ大学の塀に書かれ、1968年より後には、ミラン・クンデラによって世間に知られるようになった。

ぼくが1968年を分岐点とみなしているのは、塀にこのようなフレーズが書かれるということに、とても驚いたからだ。ぼくが目にする中国の塀に書かれているのは、ほとんどが「豊かになりたければ、子供をたくさん産まずに、木をたくさん植えましょう」といったもので、まるで中国人の頭の中には子供を産むこと以外、何もないかのようだった。だからぼくには、パリ大学の塀が世界でもっとも品位のある塀だと思われたのだ。

二十世紀には、このフレーズはなんということのないフレーズにすぎなくなった。せいぜい哲理に富んだ言葉というものでしかなく、ぼくにとってもどうということはないものになってしまった。けれど二十一世紀になって、このフレーズは毎日のようにぼくの頭の中に痕跡を残している。まるで濃硝酸が腐食した銅貨のように。点々とした痕跡を、目の前にあるかのようにありありと。消し去ることはできない。

この文章に続けて、「上海」「文章」「さすらうこと」「お金」についての軽妙なエッセイが「生活在別処」によせて綴られている。小説では、07年に刊行された長篇で郭敬明の初邦訳作品となる『悲傷逆流成河』（邦訳『悲しみは逆流して河になる』講談社、2011年）に、それぞれの理由で「別処」を渇望する高校生たちが描かれている。しかし、それは衛慧やアニー・ベイビーの作品における「別処」とは、もはやまったく違う色合いを帯びている。

自分が選択したからには。

世界のもう一方の遙か遠くに置いてしまったからには。

その色合いは、同じ80后作家で歌手、女優としての顔を持つ田原（テイエンユエン）の、やはり高校生を主人公にした07年刊行の『双生水莽』（邦訳『水の彼方 Double Mono』講談社、2009年）に見られるピュアな厭世観にも共通している。

そんなとき、私は『水莽草』という物語を読みました。読み終わって、泣いてしまいました……。自分は水莽草に宿っている幽霊なのだと思ったのです。陰陽ふたつの世界に挟まれて、本当に死んでしまうこともできなければ、生まれ変わることもできず、ただひっそりと、次にこの毒草を誤って口にしてしまう人が現れて、私と入れ換わってくれるのを待っているだけでした。

原題と異なる邦訳タイトルは訳者と田原とで考えたものだが、「彼方」という言葉がぴたりとはまったのも不思議な符合である。

フランス語の「La vie est ailleurs」は、現実世界と想像世界との対比で用いられることが多いという。本来は宗教的な意味合いであったり、詩や共産主義の理想の世界であったりした「現実の自分は本当の自分ではなく、望む生は他のところにある」という思いが、中国の若者たちの思春期の行き場のない心にぴったりと重なり、「生活在別処」というフレーズにそれぞれの思いがこめられたようだ。

世界的な金融危機にも負けず、GDPが日本を抜き世界第2位となった中国をリアルに生きる若者たちが、一方で求めずにいられない「別処」はどこにあるのか。文学作品に浮かび上がるそれぞれの「別処」から、リアルな現代中国の深い底が見えるような気がする。

※国際SILのデータベース「エスノローグ Ethnologue」ウェブ版（16版、2009年）による全世界で現在話されている言語の数。

この連載では、毎号、執筆者が変わり、世界の言語と文学を紹介していきます。

Final Dragon Library World 6

ファイナルドラゴンライブラリー

ぼくは勇者に向いてない『世界は密室でできている。』編

米光一成 Yonemitsu Kazunari

64年生。名作落ちゲー「ぷよぷよ」はじめ多数のゲームをつくるほか、小説をゲーム化しようと考える『日本文学ふいんき語り』や、誰でも手軽に参加できる電子書籍プロジェクト「電書フリマ」など、幅広い活動を見せる。
「こどものもうそうblog」http://blog.lv99.com/　twitter ID: yonemitsu

ナカシマカズユキ Nakashima Kazuyuki

67年生。作品によりまったく異なるテイストに描き分けるイラストレーター。以下のURLにはムチムチプリプリしたキャラクターたちが勢ぞろい。
http://www.nk-w.jp/

助けなきゃ。少女に向かって、ぼくは走る。石段を登る。塔のてっぺんに出る。少女は塔の壁の上に立っている。落ちるな。間に合ってくれ。

走るぼくの胸に本が当たる。手に取る。読む。またも世界から時間が失われる。

本なんて読んでる時じゃない。でも、すべてが凍り付いたように止まり、ぼくは読むことしかできなくなる。

本のタイトルは『世界は密室でできている。』。

“何とかと煙は高いところが好きと人は言うようだし父も母もルンババも僕に向かってそう言うのでどうやら僕は煙であるようだった。”

主人公の僕は、隣の家の少女が屋根から落ちるのを目撃する。彼女の弟ルンババと一緒に……。ってストーリーを紹介しようとしても、あまりの暴走＆疾走っぷりにどうすればいいのかわからない。

“「おいおい俺まで殺すなって」「何でよ。俺が死ぬんやったらまずはおめえを道連れやっつの」「俺まだ十三やぞ？何のスケベもしてないまま死ねるかって」「おめえこないだ伊藤映子のパンツ見たんやろが。あれで満足しとけ」「ボケ。パンツ一枚見たところで死ねるかアホ。とか言うても百枚なら死んでもいいって話じゃねーぞ」。”

ジャンルはミステリ小説？　殺人事件が起こって、名探偵が解決するのだからミステリだろう。だがテンポとスピードがいっちゃってる。

何しろ事件の説明をしている間に解決しちゃうのだから。

“「さ、この事件のことはちょっと置いといて、俺今からとっとと〈金髪カツラ殺人事件〉解決してまうわ」「は？金髪カツラってなんよ」「金髪のカツラ」「いや言葉の意味は判るけど、なんでそんなもんが殺人と関係あるんよ」「殺された女の人らの頭の上に、金髪のカツラが載っけられてたんや。ほやで通称〈金髪カツラ殺人事件〉」「へええ。何で金髪なんて載せてたんよ」「それは今から俺の解説聞いてたら判る。さて十分で解説終わらせてまうぞ」「はいはい」。”

と事件の紹介がはじまるやいなや、そのあと数ページで事件解決。何故そんなことをしたのかも、犯人がどこにいるかも、わかっちゃうのである。なんたるスピード。

それにこれだけ快速解決してると、密室殺人事件の出てくる量もはんぱない。なぜか遺体がひきずりまわされた跡のある密室、「あ」と一文字だけのダイイングメッセージが残された密室、同時に四つの部屋で、しかも、とんでもない状況での（ぜひ読んで驚いてほしい）密室、いや、もっと！

次々と、とんでもない密室殺人事件が登場し、あっという間に名探偵が解き明かす。ぽぽぽぽーん！　大量生産大量消費。どんな難事件でも一瞬で解決。

でも、すぐには解けない密室がある。この物語に登場する少年少女たちが抱えている密室。両親や身近な人たちとの関係から生まれる澱みや、自分でもわけわからない混沌とした気持ちに閉じ込められて。そこから、どうやって脱出するのか。

主人公の西村友紀夫と、名探偵ルンババ12こと番場潤二郎。さらに、修学旅行中、美女が不倫でケンカしてて止めようとしたら殴られて気づいたら車の中で埼玉まで来ちゃってうんぬんというきっかけで知り合った美人姉妹。彼、彼女たちは、世界の密室から抜け出せるのか。

そう。だから、これは青春小説だ。

ぼくの小説だ。

ぼくも、ようやくこの自分がいる不可思議な世界が何であるかうすうすわかってきた。読み終えると再び世界がはじまる。

少女は、ぼくに気づく。振り返る。悲鳴。追うようにしてぼくは走る。手を伸ばす。彼女をつかもうとする。刹那。間に合わない。スカートをひるがえし彼女は落下する。

ぼくは壁を越えて、ジャンプした。思い出した。そうだ、ぼくは飛びたかったんだ。ぼくは、この世界に来る前にジャンプしようとしていたんだ。

世界の密室から抜け出すために。

To be continued.

第06回 『円卓』の琴子ちゃん

げきからぶんがくにゅうもん

望月旬々
Mochizuki Shunjun

68年生。主として国内外の小説・演劇について「朝日新聞」「ポンツーン」等で望月旬名義の書評を手がける。著書に『日本文学にみる純愛百選　zero degree of 110 love sentences』（共著）。超がつくほどの辛い物好きで、職場にはカレー部があるとのウワサも。

□□□と書いて、何と読むか知ってる？

なぞなぞみたいだけど、じつは、「しかくしかくしかく」でも「くちくちくち」でも「ろろろ」でもなくって、正解は「くちろろ」。そういう名前で活動しているミュージシャンの人たちがいるんだ。音楽的には、ヒップホップ系。

その□□□の「00:00:00」（レイジレイフンレイビョウ）という曲をもとにして生まれたのが、柴幸男さんによる戯曲『わが星』。地球の誕生から消滅までをめぐる物語を、団地に暮らす少女の日常にかさねあわせながら描いた「現代口語ブレイクビーツ・ミュージカル」。すなわち、ラップの口調で演劇をやってみたらこうなりましたっていう感じの作品。自転＆公転してる惑星を丸い“ちゃぶ台”の周りでくつろぐ家族になぞらえるというアイデアは卓見で、やっぱ食卓って家庭の中心にあるべきものなんだよなあと、つくづく。

○のまわりは宇宙となる。

○のかさなりは、食事を楽にする！　上から見ると、まるで◎。英語ではLazy Susan（なまけもののスーザン）という呼び名もあるんだけど、今から約80年前に日本で発明されて中国にも広まったと言われているものはといえば……そう、中華料理屋さんの回転テーブル。

というわけで、今回ご紹介する本は、西加奈子さんによる『円卓』。3LDKの公団住宅に3世代同居するという家庭環境のなか、小学3年生の女の子が「新しい言葉」を聞きかじりながら成長してゆく、おもろい＆かわいい教養小説。大阪の子どもが、“ひらがな目線”で、歌うように世界をとらえてゆく。目と耳で楽しめる、ドラマティックな名作だ。

渦原琴子ちゃんは、早生まれの8歳。呼び名は、こっこ。「うるさいぼけ。」が口ぐせで、大好きな言葉は「孤独」！　寝食をともにしている祖父母・両親・三つ子の姉たちから、8人家族の末っ娘として可愛がられている。でも、大家族の一員という平凡さに甘んじられず、普通じゃないことに強くあこがれている。みんなと違う自分を夢想する、芸術家肌。

そんな渦原家の食卓に並ぶのは、〈麻婆春雨茄子豆腐と、トマトにわさびマヨネーズ、水茄子の漬物と、じゃがいもとニラの味噌汁だ。〔……〕基本的にかさ高い。例えば肉じゃがには豚、いも、人参以外にブロッコリー、ゆで玉子などが入るし、週一度は冷蔵庫の中身を総ざらいにしたカレー〉。ぐちゃぐちゃだけど美味しい大皿料理が、深紅の円卓の上をぐるぐる回る。〈なんたる健やかで、デリカシーのない食べ物であろうか。大家族の幸せそのもの、ではないか〉。

「いうて俺ら貧乏やけど、家族仲良し、幸せやんな！」という雰囲気に、こっこは反発してしまう。それゆえ食事中に、円卓の回転がピタリと止まるほどの報告――「お母さんに、赤ちゃんができました！」を聞いても、嬉しないし。

というか、麦粒腫（“ものもらい”として知られる伝染病）にかかったクラスメイトの美少女の「眼帯」をうらやましく思ったり、不整脈（心臓のリズムが狂う原因不明の病気）で苦しんだ学級委員の美少年の「パニック」さえもねたましく思ったりするらしく、思い立ったが吉日とばかりに真似してしまうという……こっこのKY度たるや、すごい。

でも、大丈夫。こっこの隣の家に住む幼馴染の男の子が、彼女をしっかり受け止めたうえで「説教」してくれるんだ。しかも、こっこにとって、めっちゃ格好良い話し方で――「お、俺の話し方はな、き、吃音いうてな、世の中では、あ、あかんことと、されてるからや。ふ、不整脈と一緒や。け、健康な人が、あかんことを、ま、真似するんは、あかん。馬鹿にしてると、お、お、思われるんや。」

個性ゆたかな愛すべき登場人物たちにめぐまれて、物語はカラフルに彩られていく。そして、夏休みもなかばを過ぎたころ、灰色のつなぎを着た〈鼠人間〉に団地の中で遭遇した主人公は、ついに……という思いもよらぬ展開はもちろん、こっこが大切にしてきたジャポニカ学習帳から自由になった「個性的な文字」が空に舞うラストシーンも、素晴らしい。

もし鹿せんべいに激辛味があったら食べてみたいと思える人は、読んで然るべし！

◉ベルクから生まれた本
食の職
小さなお店ベルクの発想
副店長 迫川尚子
愛される「味」「仕事」を生み出す秘訣とは？
食と仕事についての美味しい本。ベルク第2弾は職人vs経営者！

定価◉1,600円＋税
ISBN:978-4-86020-402-0
ブルース・インターアクションズ
http://bls-act.co.jp/

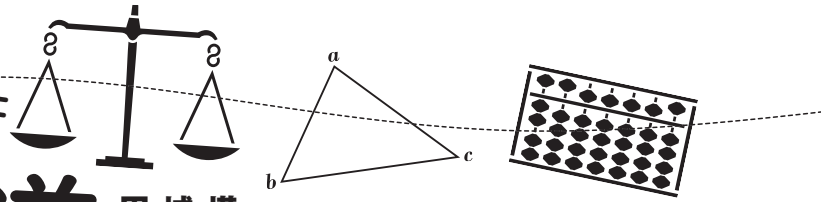
ロングセラー8刷！
新宿駅最後の小さなお店ベルク
店長 井野朋也
究極の大衆飲食店はこうしてできた！
そのノウハウを書いた本。ユニークな経営術がわかる。個人店が生き残るには？

定価◉1,600円＋税
ISBN:978-4-86020-277-4
ブルース・インターアクションズ
一万人以上がベルク立ち退きに反対署名！
詳しくはベルク・ブログ(http://noraneko.exblog.jp/)にて。

コーヒー ¥210
生ビール ¥315
Beer＆Cafe
BERG
ベルク
☎ 03-3226-1288
http://www.berg.jp
↑ベルク通信、全バックナンバーがご覧になれます。
JR新宿駅東口改札出てすぐ
（ルミネエストB1）
WB常設。コーヒーのお供に。

数学への長い道

第3回 √2



円城塔
EnJoe Toh

72年生。大学で物理を研究していた理系作家。あなたの身近な後藤さんから銀河の彼方の帝国まで、あらゆるものを語ってみせる"大ぼら吹き"。作中にちりばめられた仕掛けがいつも読者を途方に暮れさせる。『烏有此譚（うゆうしたん）』で、第32回野間文芸新人賞を受賞。

そこにいる誰かが数学者かどうかを判定する簡単なテストを考えてみましょう。

「道に迷って難渋しているのですが、√2ってなんでしたろうか」とためしにきいてみて下さい。相手は、「ひとよひとよにひとみごろ……」とか呪文を唱えたりしはじめるかも知れませんが、そこでひるんでは負けです。

「喉が渇いて仕方がないので、√2の定義を教えて下さい」

とか問うと良いです。

「√2とは、自分と掛けると2になる数なのじゃ……」

「おお、数学者だ、数学者様が出たぞう」

と喜ぶのは早すぎまして、そのくらいは中学校かどこかで習う内容です。もっと難しい内容を問えば良さそうですが、自分が何をきいているのか理解していなければ、出鱈目を答えられてもわかりません。ですから、相手には続けてこうきいてみて下さい。

「まだどんな数かわからないものを、"掛ける"ことはできるのですか」

はい？　という顔をされたらそいつは偽数学者なので、倒して良いです。何か呪文を唱えはじめても同じ。

「それはいいところに気がついたね、是非じっくり話し合おうじゃないか……」

ときたら、相手はきっと数学者です。ひと睨みされて終わりということも十分にありうるわけですけれども。まあ多分、理解ができるようになるまで親切に教えてくれると思います。わたしにきかれても答えられません。

さて、ここで問題となっているのは、√2って何？　ってことです。そいつは小数点の右側へ延々とどこまでも繰り返しなく続く数字で、$x^2-2=0$の解の正の方で、とかまあ色々あるわけですが、筆算なんか思い出してみましょう。自分と掛けて本当に2となるかどうかは、そうして確認するのが一番よさそうですから。

ところがはた、と――筆算って、一番右の桁から掛けるものではなかったかしら――小数点以下無限に続く、一番右の桁って何？と素朴に疑問に思うはずです。思って下さい。

数って、一体、何でしたっけか。

知らん、というのも、それはそれで男らしく頭の悪い態度だとは思うのですが、人間が直観的に捉えられるのは、どうやら1、2、3とか、小さな整数だけのようです。19世紀の偉大な数学者クロネッカーは、「整数は神のつくったものだが、それ以外は人間のつくったものだ」と言ったのだとか言わなかったのだとか。まあ極端な例ではあります。

これは多分、人口の九割九分の人が信じていると勝手に睨んでいるのですが、全ての数には右隣の数があると何となく思っていたりはしないでしょうか。1の右隣は2とか、3の右隣は4とか。整数を考える場合にそれは確かに正しいのですが、では分数全体の場合はどうでしょう。⅓の右隣は⅔でしょうか。½は、⅓と⅔の間にありますが、どうしましょうか。じゃあ、½とした方には、4/9はどうするかとか。

数直線にはみっちり数が並んでいると考えるとして、全ての数には右隣があったりするでしょうか。

「⅓の右隣は、⅓＋εだ、ちなみにεは無限小」

と言い出す人もいそうですが、無限小はいくつ足すと、1まで届くとすればよろしいでしょうか。まあ、"隣"というのは分数を考えるのに、それほど良い考え方ではなかったりします。

「1以下の最大の数は？」これは1です。

「1未満の最大の数は？」分数までを考えると、これは、ありません。1未満最大の数があったとして、その数と1の間には、まだ分数が無限個いたりしますから。

といった、数の性質というものにどのくらいの人たちが興味を持つかはよくわからないままなのですが、一つ確かなことがあります。

直観だけではどうにも話がくいちがってしまう対象をずっと議論し続けて、理解可能な枠組みをつくってきたのが数学者です。首尾一貫を整えること。理解可能な枠組みを新たに作り出すことは、可能なのです。可能というか、数学者が日々実際に行っている仕事です。

新たな枠組みを記述する新たな言葉ができたりします。

「デデキント切断」なる言葉が生まれ、無理数って何だっけという理解が進み、上の「√2って何」という素朴な問いに対する議論可能な土台が整うのは、ようやく19世紀の終わりの出来事なのでした。

そこから展開していくことになる、無限を巡る多くの議論や、20世紀初頭に生じた「数学の危機」については、機会があったらまたいずれ。

FUSOSHA BOOK
大鶴義丹14年ぶりの小説作品
その役、あて書き
大鶴義丹 著 ■定価1,575円（税込）
すべてはただピアノのために！
人気ジャズピアニストの真摯で痛切なメモワール
マイ・フーリッシュ・ハート
南博 著 ■定価1,995円（税込）

超世代文芸クオリティマガジン
ホームページからのご注文も可能です。全国の書店で発売中！
en-taxi
ODAIBA MOOK No.32 SPRING 2011
［エンタクシ…］32号
A5判 定価860円（税込）
責任編集
坪内祐三
福田和也
リリー・フランキー
好評発売中
［緊急大特集］
作家たちの東日本大震災
佐伯一麦 仙台烈震 ―大震災日記（抄）
平間至 無声のモノクローム ―故郷・塩竈の爪痕を目の前にして
赤瀬川原平／生島淳／柴崎友香
坪内祐三／前野久美子／大場純子
［アンケート］作家35人の「あの時」と「今、思うこと」
嵐山光三郎／石田千
ECD／泉麻人
市川真人／志治夫
大竹聡／大村彦次郎
岡崎武志／荻原魚雷
春日武彦／辛酸なめ子
管啓次郎／鈴木則文
高田文夫／高橋秀実
武田徹／中野翠
中山康樹／南陀楼綾繁
橋本麻里／原武史
平松洋子／平山夢明
古川日出男／藤森照信
前田司郎／南博／宮田珠己
村松友視／森山大道
山口文憲／山田太一
横尾忠則／渡辺俊美
［小説］小池昌代／大竹聡／藤原敬之
［連載］角川句会手帖 青山七恵 vs 角川春樹
［評論］福田和也「三一致と古典主義」／三島由紀夫と三谷幸喜
扶桑社 〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1 http://www.fusosha.co.jp
エンタクシー バックナンバー●書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

つぎ、どこ行くの？

江南亜美子

人口や面積や平均気温といった数字は、その土地のムードをなにも教えてくれない。小説作品を読み、自室に居ながらにして彼の地の空気を味わったなら、つぎは書を持ったまま、その町に出ていこう。

第二回◉何度でも生まれなおす場所、神戸へ

みる

阪神淡路大震災の土地区画整理事業がすべて完了したというニュースが伝えられたのは、東日本大震災による東北地方のダメージに多くの人が打ちのめされていた今年3月28日のことだった。地震発生から16年あまり。この長い年月を想えば、一瞬にして人々の生活基盤をうばった自然の破壊力にあらためて恐怖するが、ニュースはひとつの希望の灯にもなった。もちろん先の震災と東日本大震災では、規模や津波と原発事故を伴った深刻度は異なるだろう。しかしいま神戸の町を歩けば、その美しさ、その繁栄、その人々の放熱の力強さに、東北地方の未来を幻視することができる。京阪神は復興を果たした。痛めつけられた土地はかならず息を吹き返す。

兵庫県は全国12位の面積を持ち、南北それぞれが瀬戸内海と日本海に接しているが、神戸中心部あたりはコンパクトな町という印象を与える。**村上春樹**もデビュー作『**風の歌を聴け**』で、夏に故郷に帰省した大学生の視点を借りて、こんなふうに書いている。

〈前は海、後ろは山、隣りには巨大な港街がある。ほんの小さな街だ。港からの帰り、国道を車で飛ばす時には煙草は吸わないことにしている。マッチをすり終るころには車はもう街を通りすぎているからだ〉

春樹は震災から二年後、西宮から三宮まで歩いた（『**辺境・近境**』）。途中、高台の出身高校から神戸港を見下ろし、30年前へと思いを馳せる。あるいは偶然立ち寄った、新築ホテルのコーヒーラウンジで、その数ヶ月後に発砲事件が起きたことに関し、「暴力」の理不尽さを〈過去と現実と未来とが、立体交差のように行き来している〉と記すのも印象的だ。時間は非情なもの。震災で壊れ、新築されたそのホテルもいまは名前が変わった。

あそぶ

戦前の神戸の華やぎを、**谷崎潤一郎**はこよなく愛した。いわずとしれた『**細雪**』で大阪船場の上流階級に属する四姉妹たちは、古き良き伝統行事を守る一方で、神戸へ出掛けてユーハイムでお茶を飲み、外国人と交流し、新しいアクティビティにも挑戦する。

〈これから新開地の聚楽館の屋上にあるスケート場へ行くのだと云って、あなたもお暇なら是非いらっしゃいと頻りに誘った。妙子は（略）運動競技には自信があるので、ともかくも一緒に行ってみた〉

かつての繁華街新開地は、現在では三宮や元町にその役割を譲ったが、神戸の新しいものへの欲望は今も昔もかわらない。元町から神戸高速鉄道で3駅、聚楽横町の名の残るあたりに、その名残を探しにいくのもいい。

泊まる

戦時下の神戸には、ある種の熱気がこもっていた。**西東三鬼**は『**神戸**』で、トーアロード（現在のトアロード。旧居留地と山の手を南北に結ぶ坂道）にある妖しい「ハキダメホテル」に長期滞在する男の話を書いた。白系ロシア、エジプト、台湾など、国際色に富む面々が〈戦時色というエタイの知れない暴力に最後まで抵抗〉するそこは、まるで魔窟だ。

〈東京の過去から逃げ出した私は、戦時とも思えない神戸の、コスモポリタンが沈殿しているホテルに落ちつき、全身で何か新しい人生の出来事を期待していた〉

このあとホテルは空襲で焼けおちるが、この過酷な体験を経て、神戸は「自由」と「多様性」をもった都市として復興する。土地は何度傷ついてもそのたびに再生し、私たちの心の平安の場所となるのだ。

神戸を見よ。神戸を歩け。そして東北を強く想おう。

買う　コンペイ糖

中華街からハイブランドの路面店の並ぶ居留地、そして北上して生田神社までを歩けば、中心部の異なる顔を一気に見ることができる。中山手通りでは、汽車にくべれば動力にもなるという七色に輝くコンペイ糖を、ぜひお土産に買いたいものだ。青い窓が特徴の店という。

〈ふつうの宝石の大きさのものから、ボンボンのつぶくらいまで、色はとりどり、赤、紫、緑、黄、それらの中間色のあらゆる種類がある。これが三段になったガラス棚の上にのせられて、互いに競争するように光っている〉

稲垣足穂「星を売る店」より

乗る　神戸港発のフェリー

神戸港からは九州や上海などと結ぶフェリーが出ている。船旅は風情だ。ひょっとすると、神戸を出たがって所在をくらませた恋人を探しつづける、まぬけ顔の男の子に出会えるかもしれない。

〈新しいターミナル・ビルは空港とよく似た造りになっていて、大きな電光掲示板が、次の船を知らせていた。（略）今日の船は、十一時前の一本で終わりだ。切符売り場で働いている人たちは、僕を見てどう思ってるかな。今日一日、ここに座ってるバカがいるって噂してるかもしれない〉

伊藤たかみ『助手席にて、グルグル・ダンスを踊って』より

食べる　「与兵」のにぎり寿司

神戸は洋食もいけるし、中華街には隠れた名店があるしと、食べるところには困らない。目と舌のよかった作家は、路地の奥に美味しい寿司屋を見つけたようだ。あくまでも上方風にこだわって。

〈彼の握るのは上方趣味の頗る顕著なものであった。たとえば酢は東京流の黄色いのを使わないで、白いのを使った。醤油も、東京人は決して使わない関西の溜を使い、蝦、烏賊、鮑等の鮨には食塩を振りかけて食べるようにすすめた。そして種は、つい眼の前の瀬戸内海で獲れる魚なら何でも握った〉

谷崎潤一郎『細雪』より

Enami Amiko　75年生。女性誌・文芸誌・カルチャー誌などで書く書評は氷山の一角、いったい一日が何時間あればそれだけの数の小説を読めるのか、と周囲が驚くほどの小説好き。共著に『日本文学にみる純愛百選』など。

photo by 加藤裕世　illustration by 鶴谷香央理

〈社会〉の思考

大澤真幸
Ohsawa Masachi

『〈自由〉の条件』や『ナショナリズムの由来』など、社会構造の観察と本源的理性への思考を綜合する思考を繰り出し続ける社会学者であり思想家。同時にスポーツや文学の批評も手がけるなど、フィールドを横断した活躍をみせている。毎号多彩なゲストを迎える月刊個人誌『THINKING O』を左右社より刊行中。

第3回　ウラン爺の滑稽な最期

1950年代末期に「ウラン爺」と呼ばれ、多くの日本人の羨望を集めた男がいた（以下、この男については武田徹の『「核」論』（中公文庫）に基づく）。本名は東善作。東は、1893年石川県に生まれ、岡山県の関西中学に進学した。同期生に、後に経団連会長になった土光敏光がいた。土光もユニークな人だが、その土光が東を「同期一の変わり種」と呼んでいるのだから、東は相当な変人だったのだろう。

この男東善作は、知略を用いてウラン採掘権を獲得し、ウラン鉱業株式会社を設立した。この会社と、原子燃料公社（後の動燃）との間にウラン採掘をめぐる契約が締結されたのが、1957年10月9日である。以降、公社がウランを採掘すればするほど、自動的に東（の会社）には金が入ってくる仕組みが確立した。

その3年半ほど前の1954年3月1日に、第五福竜丸の被曝事件が起きている。この日、マーシャル諸島近海で操業していたマグロ漁船第五福竜丸は、アメリカがビキニ環礁で行った水爆実験に遭遇し、全船員、船体、そして捕獲した魚が放射性降下物に被曝したのだ。被曝した船員の中の一人は、半年後に死亡した。この事故をきっかけとして、反核の世論が急激に高まり、また――福島第一原発事故の渦中にある現在と同様に――放射性物質への恐怖が引き起こされた。たとえば、放射性物質が残留しているのではないかとの危惧から魚肉の消費量が落ち込み、「放射能マグロ」とされたマグロが大量に廃棄されたりした。

しかし、奇妙なことに、こうした反核の世論の高まりとほとんど同時に、まったく反対のことを指向する運動、原子力利用を目指す運動も盛り上がっているのである。1953年に、アイゼンハウアー米大統領が、国連総会で「原子力を平和目的に利用すべし」と演説し、これに対応するように、日本では、中曽根康弘によって原子炉築造予算2億3500万円が国会に提案され、可決された。第五福竜丸の事件が起きたのは、こうしたことが起きたすぐ後のことである。しかし、これによって原子力推進の気運が消えたわけではなかった。

むしろ、原子力利用を謳う運動は、事件の後に盛り上がっている。1955年5月には、アメリカから来た原子力平和利用使節団の講演会が行われ、同年10月には日比谷公園で原子力平和利用博覧会も開催された。原子力利用推進運動の中心には、正力松太郎に率いられた讀賣新聞があった。正力の背後には、さらに、日本テレビの柴田秀利やアメリカのCIA関係者がいたことが、現在ではわかっている。ただし、正力は、原子力について深く理解した上で、その利用を推進しようとしていたわけではない。その証拠に、彼は、1955年12月に科学技術振興対策特別委員会に出席したとき、「核燃料」を「ガイネンリョウ」と読んで満場の失笑を買い、社会党の成田知巳に、正式な発言を通じてわざわざ訂正までされている。

ともあれ、この原子力利用の運動が、正力や讀賣だけの独りよがりではなく、むしろ国民的な意識を反映していたことは、たとえば大江健三郎でさえ次のように述べていることからもわかる。「核開発は必要だということについてぼくはまったく賛成です。このエネルギー源を人類の生命の新しい要素にくわえることについて反対したいとは決して思わない」と。

原子力利用のキャンペーンの中、ウラン鉱山探しがブームになる。そんな中で東善作だけが、アメリカからガイガーカウンターまで取り寄せて捜索した。最終的には、彼は、通産省地質調査室のジープを密かに尾行し、通産省の調査隊の発見を横取りするような形で、人形峠のウラン採掘権を獲得する。

日本中の羨望の的となった東は、ウラン鉱入りの風呂に入ったり、ウラン鉱を混ぜた肥料で育てた野菜を食べたりして、ウランの効能を宣伝した。現在のわれわれから見ると、驚愕の無謀ぶりだ。当時、ウランや核エネルギーが、あらゆる幸福、理想の人生や社会への神秘的で超越的な媒体のように感じられていたことがわかる。が、繰り返し確認しておけば、このとき同時に、第五福竜丸の災難等を通じて、放射線の恐ろしさも印象づけられていた。最悪の災禍をもたらしうる物が、幸福への鍵に通じていることになる。

この事実は、哲学史を若干知っている者には、ハイデガーが、「物 Das Ding」と題した文章で展開したギリシアの壺についての分析を連想させる。ギリシアの壺は象徴的な価値をもつ特別な物である。どうして象徴的な価値が宿るのか。ハイデガーによれば、それは、壺が、およそ考えられる限り最もつまらないもの、最も無意味なものを包み込んでいるからだ。最もつまらないものとは「空虚」である。

さらに、ハイデガーの論は、フロイトの一見素朴な指摘と類似している。フロイトによれば、排泄物は、幼児の親への最初の贈り物である。つまり、最も貴重な物こそが同時に、最もつまらない物、それどころか廃棄すべき汚物でもある。

これらの事物（壺、排泄物）において、それらが崇高なまでの価値をもつというアスペクトとそれらがときに嫌悪さえ催しうる不要な対象であるというアスペクトは不可分である。これと同じ両義性を極限にまでつきつめたときに得られる物体が、今日、われわれが目の当たりにしている原子力発電所ではないか。今から半世紀前には、原子力は、幸福な生と社会を全面的に保証する最高の貴重品として現れていた。今日、われわれは、原子力発電所が、手におえないほどやっかいな廃棄物で（も）あることを知っている。50年代には、原子力の正の側面と負の側面とは、どこかでくっきりと分けられていて、前者だけを取り出すことが可能だと信じられていたが、今日のわれわれは両側面が厳密に合致していることを否が応でも自覚せざるをえない。かつてオットー・ヴァイニンガーは溶岩を「地球の便」と呼んだことがある。これに倣えば、原発――社会のエネルギーの最も重要な源泉――は、まさしく社会システムの便である。

この「便」を後生大事に抱え込んだウラン爺は、たいして儲けることもなく、採掘権を獲得してから十年後に肺癌で死んだ。この最期が、われわれの社会の将来の隠喩ではないことを望むばかりである。

創刊120周年記念
第24回早稲田文学新人賞
応募〆切延長！
二〇一一年九月末日
（当日消印有効）

東日本震災の広範な影響を考慮して、第24回早稲田文学新人賞の応募〆切を二〇一一年九月末日まで延長します。どうぞ奮ってご応募ください。すでに作品をご送付いただいた方も、再度ご応募いただけます。

選考委員
蓮實重彦

募集要項
◉募集対象：小説（未発表のもの）。◉応募枚数：四百字詰め原稿用紙換算で百枚程度を上限とします。◉応募資格：国籍、年齢、性別を問いません。◉受賞作：選考委員選出によって一点を決定。◉発表：二〇一一年度下半期発行の「早稲田文学」本誌を予定。◉本賞：賞状ほかに副賞として十万円と、選考委員の著作を授与。

応募方法
◉タイトル・筆名・本名・住所・連絡先電話番号・メールアドレス（メールを使わない場合は不要）・職業・略歴を、別紙に明記して同封してください。作品の一枚目には必ずタイトルのみを記入してください。◉応募原稿の書式については、詳細情報をご参照ください。◉封筒に「新人賞係あて」と朱書のうえ、左記宛先までお送りください。◉必ず郵便にてお送りください。メール・FAXでの応募は受け付けておりません。応募作品は返却しませんので、手書き原稿は必ずコピーをとってお送りください。選考の経過・結果についてのお問合せにはお答えできません。◉以上を満たさない作品は選考の対象外となります。あらかじめご了解ください。◉詳細は発売中の「早稲田文学π」または小誌サイトにて。

早稲田文学編集室◉東京都新宿区西早稲田一―九―一二―二〇三◉TEL／FAX〇三―三二一〇―〇―七九六〇◉www.bungaku.net/wasebun/

「草子ブックガイド」本編、待望の単行本化決定!! 第1巻は9月発売予定。続報を待て!

日直から。

今号の日直
藤井久子

再生可能エネルギーによる脱原発は可能か

エネルギー資源を見直す

Fujii Hisako

56年生。環境ビジネス関連の取材・執筆を手掛けるほか、日中韓・東アジア文学フォーラムのコーディネイターも勤める。共著に『よくわかる環境ビジネス』（産学社）など。再生可能エネルギーに関わる技術者の仕事について取材中。

福島第一原子力発電所の「事故」と放射性物質の拡散を契機に、世界的にもエネルギー政策の見直しが進みつつある中で、再生可能エネルギーが一段とクローズアップされている。

再生可能エネルギー（自然エネルギーともいわれる）には太陽光、風力、水力（ダムのような巨大構造物をつくらない規模の小さいもの）、地熱、バイオマス（木材等の有機資源）などがあり、石油などの化石燃料やウランが枯渇性かつ地下資源であるのに対し、持続的に利用できる地上（地熱の場合は地表）資源である。

では、再生可能エネルギーによって電力需要はまかなえるのか。今年4月21日、環境省は「平成22年度再生可能エネルギー導入ポテンシャル調査　概要」を公表した。ここでは太陽光（非住宅系）、風力、中小水力（設備容量3万kW未満）、地熱の4項を取りあげている。現在の技術水準で利用でき、法規制や土地の条件など制約となる要因を考慮した上で、潜在的な導入可能量を算出、4項合計でざっと20億kWという大きな可能性が示された。「エネルギー白書2010」（資源エネルギー庁）によれば、2010年3月末に国内で稼動中の原発54基の総出力は4884.7万kWである。

上記の「調査概要」では、2012年の実施を目指す「電気事業者による再生可能エネルギー電気の調達に関する特別措置法案（FIT法案）」による促進効果により、少なく見積もって約2,600万kWの導入が見込まれるとしている。震災当日の3月11日午前に閣議決定されたFIT法案は、今国会に提出されている。これは、電力事業者に対して再生可能エネルギー源で発電される電気を全量、一定期間・価格で買い取ることを義務づけるものだ。「調査概要」では、さらに技術革新が加われば、最もポテンシャルの高い風力発電だけで4億kWの導入が可能と推計している。

その気になれば、再生可能エネルギーへの転換による脱原発は可能なのだ。

岩手県北部の山あいに位置する葛巻町は、再生可能エネルギーだけで町の消費電力量を上回る発電施設を持つ。定格出力1,750kWの風車12基のほか、定格出力400kWの風車3基、家畜排泄物のメタン発酵あるいは間伐材のガス化によるバイオマス発電、学校や公共施設への太陽光発電導入などで、総発電量は同町の消費電力の160％に及ぶ。人口約7,700人（約2,900世帯）、酪農と林業を基幹産業とし、山ぶどうを使ったワインが特産品だ。産業構造や、年間9ヵ月は8〜10mの風が吹く地形および気象条件を活かした再生可能エネルギーの導入例として知られ、毎年50万人がこの「風の町」を訪れる。温泉もゴルフ場、スキー場もない町に、発電施設は観光資源としても収入をもたらしている。

再生可能エネルギー導入のネックとされるのは、気象条件などによる発電量の不安定さだが、それぞれの地域の気候、地形、産業特性に合わせて複数の再生可能エネルギー源を組み合わせ、世界のトップレベルにある（と産業界が誇る）日本の蓄電池とエネルギー制御技術を投入すれば、地域分散型の安定した電力供給網を構築できるのではないか。前出の「調査概要」は北海道、東北で特に風力発電のポテンシャルが高く、導入可能な資源量は現状の電力供給能力を上回ると試算している。葛巻町と同様に、地域単位で風力を軸とした再生可能エネルギーの「自給自足」をかんがえられるだろう。

従来の電力供給システムは火力発電、ダム式など大水力発電に原子力発電が加わった、大規模発電施設による一括供給体制だった。しかし、福島第一原発の破綻が東京電力管内の電力供給の危機を招いたことを考えれば、発電所の小型化・分散化は災害のリスクマネージメントとして有効であることは容易にイメージできる。また大規模発電所からの一括供給は、距離に比例する送電ロスも伴う。資源エネルギー庁は「エネルギー白書2005」などで送電および発電ロスを全発電量の5％程度としている。経済産業省が5月13日に公表した「夏期最大電力使用日の需要構造推計」では、東京電力管内の需要推計に「送電ロス分約10％」をのせているから、複数の発電所を供給エリア外に持つ東京電力は、特に送電ロスが大きいのかもしれない。地域ごとの電力供給網は、送電距離が短いこともメリットとして挙げられる。

ここで問題となるのは送電網だ。現在は国内10社の電力会社が送電線も独占している。このため、葛巻町の場合も独自に町内に配電することはできない。発電電力は東北電力に売り、消費電力は東北電力から買わざるを得ない。震災時も3日間停電したという。再生可能エネルギーによる分散型電力網を構築するためには、送電と発電を分離することが要点となる。欧米では発電と送電が分離されており、福島第一原発「事故」以降、日本でも分離が議論にのぼっている。消費者の一人としては、エネルギー源によって電力購入先を選択する自由が欲しい。再生可能エネルギーを買いたいとする消費者が増えれば、それだけ導入スピードは加速するはずだ。

近年、世界では再生可能エネルギー導入に拍車がかかり、太陽光発電、風力発電は中国、インドでも急速に伸びている。イギリス、ドイツは洋上風力発電に力を入れており、原発大国のアメリカでも多様な再生可能エネルギーの利用を進めている。4月21日にワールドウォッチ研究所（アメリカの民間シンクタンク）が発表した、世界の原子力産業の現状に関するレポート（2010-11版）は、2010年に世界の再生可能エネルギー（太陽光、風力、小水力、バイオマスおよび廃棄物のエネルギー回収）総発電量が3億8100万kWに達し、初めて原発の総発電量3億7500万kWを越えたと報告している。再生可能エネルギー導入目標値をEUは2020年までに最終エネルギーの20％、中国は20年までに同15％、ブラジルは30年までに電力の75％としている。日本は自民党政権下で20年までに3％で、民主党・鳩山政権で同10％となったが、大規模水力発電の扱いなど、その内容は曖昧なままだった。5月26日、G8首脳会議で菅直人首相は2020年代の早い時期に再生可能エネルギーの割合を20％以上にする考えを表明したが、この目標に向けて政官財が動くかどうか心もとない状況だ。

再生可能エネルギーの発電技術は確立されている。世界で3番目の資源量を持ちながら日本では導入例が少ない地熱発電では、世界の地熱発電所タービンの6割強を日本のメーカーが納入している。農業用水などを利用した小水力発電、住宅でも設置できる小型風力発電も日本の得意とするところだ。こうした技術をなぜ国内でもっと活かさないのか。オーストラリアで始まっている波力発電も、島国の日本にとって大きな可能性を持っている。

2010年に中国が風力発電施設容量で世界トップに立った背景には、国をあげた風力発電産業の育成がある。EUは再生可能エネルギーの全量買取をはじめとする促進施策によって、その割合を高めてきた。日本でもFIT法案に続く意欲的な施策が打ち出されれば、エネルギーを輸入資源に頼らない社会に移行していくことができるだろう。

この連載では、毎号、執筆者が変わり、さまざまな話題をとりあげます。

WASEDA bungaku FreePaper
vol.023_2011_summer

愉しい文学
Wonderful BUNGAKU

こども WB

¥0

今日マチ子